

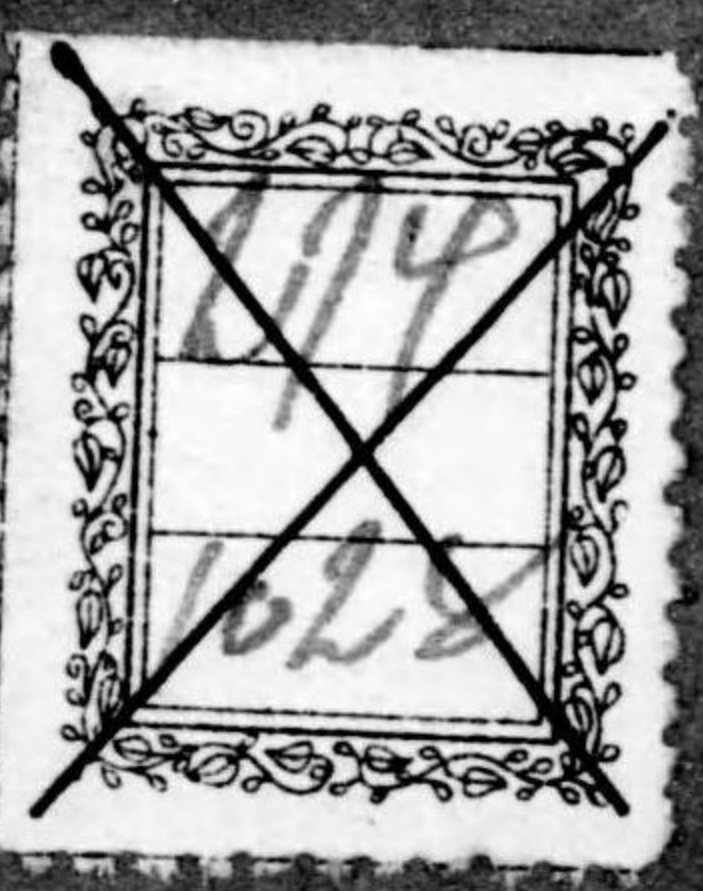
特 100

589

アガギ叢書

# 神曲

ダレンテ作



# 始



特  
58



綴七十二第書叢ア

神  
曲

伊太利文豪  
ダンテ・アリギエリ原作  
村上静人編

大正  
3. 10. 22  
内交

(華エデリホ・エレン) スリトアゼとナンダ

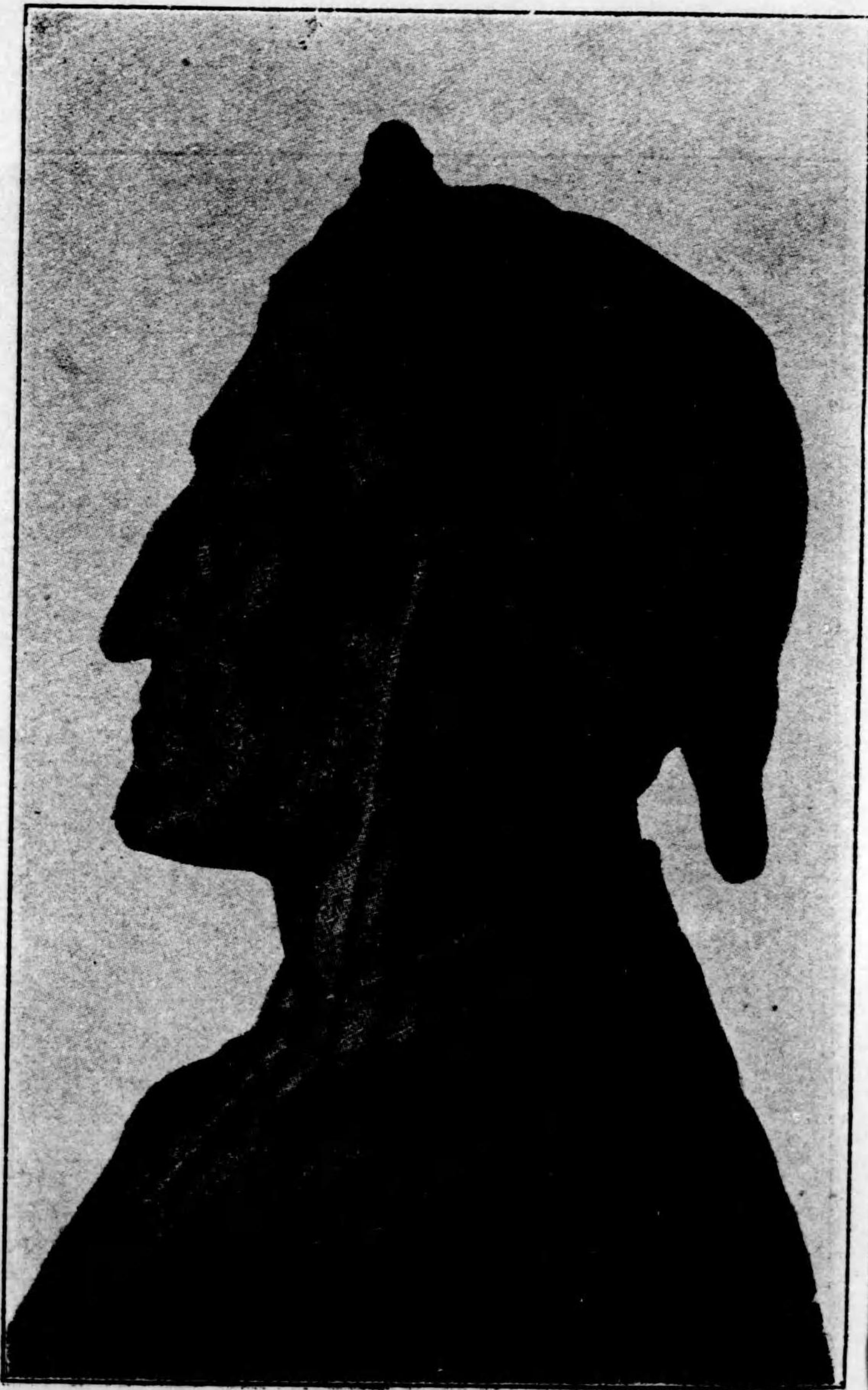


にかや擔も身の衣白き高丈てつま袂に間の女の人二ならやじ同

### アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久らして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過



テングダ者著原

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尅大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず  
閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行する  
に至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十銭  
にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。  
如何に尅大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。  
依つて以て従來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫  
の、高價、尅大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんと  
す。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。  
希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

( 2 )

大正三年三月

赤城正藏白

船渡のソロケア



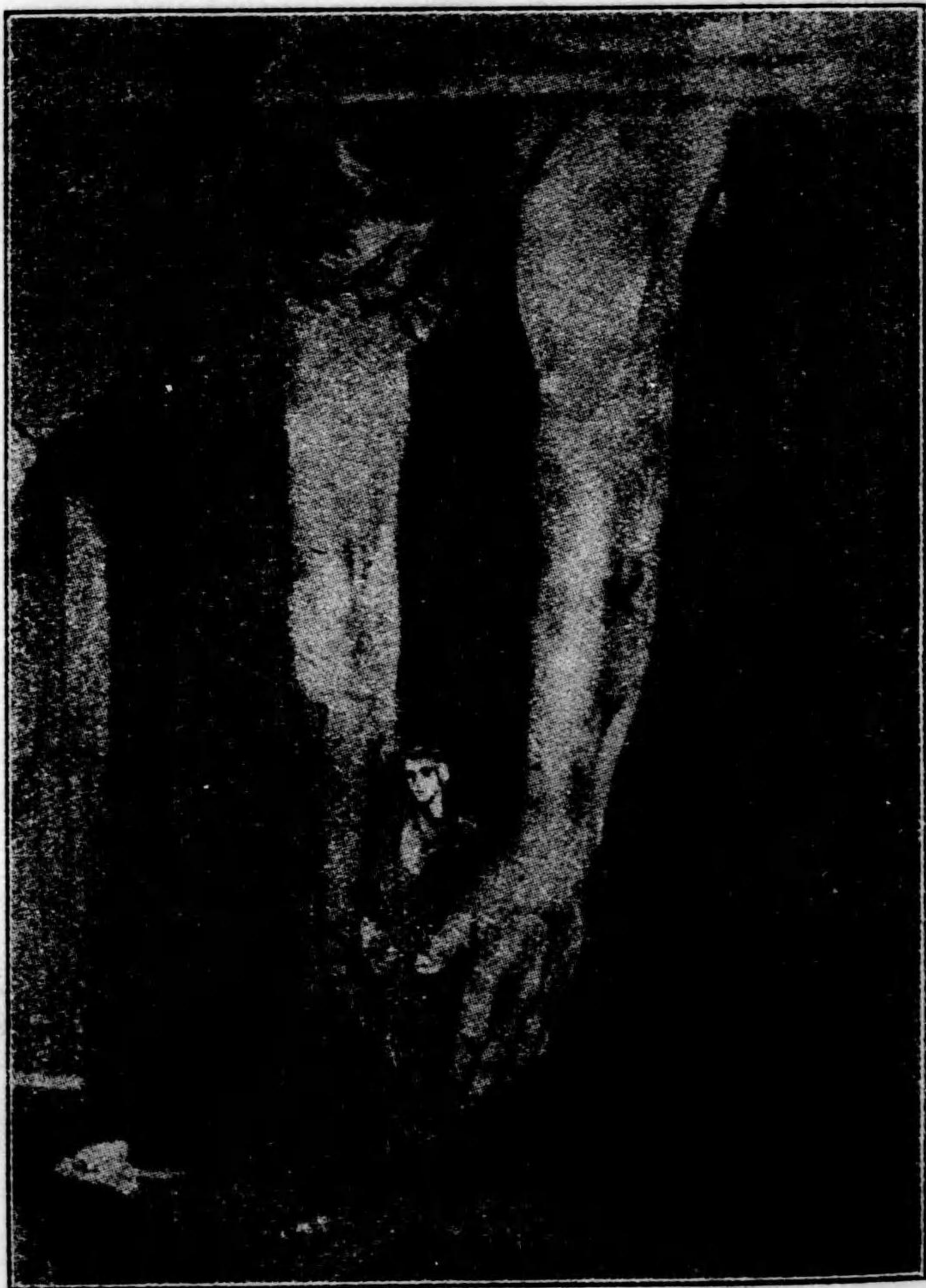
……てつ振を擡ソロアカ鬼魔の眼の炎  
(照参頁三二)

夢のテング



知報の死のスリトアベ

巨 人 の 獄



詩人 bottom 岩根に下した  
(参照頁九三)

テンダ・ゼルボレに降る



ゲリエンのは大船のめぐるが如く……  
(参照頁五三)

金剛石の扉口



浄罪界の入口を守る天使の剣を持つて座して  
(照参頁二五)

靈の小舟



急ぎ跪け天使の船と  
(照参頁七四)





たて果れ忘もを世もを身に笑微の妙微はテンダ  
(照参頁七七)

はしがき

ダンテの神曲 (Göttliche Komödie) は、實に世界の寶典とまでされてをるものです。随つて、その内容も頗る壯嚴を極めたもので、加ふるに、この種のものうちでは、ゲーテの『ファウスト』などと共に、最も難解のもの一つに數へられてゐます。

従つて、レクラム叢書中に收められてゐるカアル・ストレックフス、及びドクトル・ドルフ・プライアレルの兩氏に依つて成つた獨譯『神曲』の如きも、その六百餘頁中、その約三分の二位は、註解を以て満たされてゐます。

その位ですから、この一小冊では、到底その萬分一の面影をも傳へられなかつたことと思ひますが、せめて、この貴き寶典の餘薫なりとも傳へられたとしたならば、それは私の非常な幸だと思ひます。

兎に角、この『神曲』を知るには、同時に、その作者たるダンテをも、少し知つて置く必要があると思ひますので、本書に於ては、その解題として、特にやゝ長いものを書いて置きました。

大正三年八月七日

編 者 識

# 『神曲』の解題

村 上 静 人 編

(一)

近代文學の大教主、詩聖ダンテは、古代と近代の間に架つた一大橋梁である。曠世の名著『神曲』は、詩聖が代表的傑作である。古來、各國の文人學者達が、ダンテ及びその『神曲』の翫賞研究に指を染めて、謂得ダンテ學なる古典研讃の科をなしたのも、決して所以のない事ではない。高潔なるダンテが人格、強烈なる詩聖の個人性、剛健矜高で、數奇な後半生を送つた其性行言動はもとより、『天上と地上の詩歌』なる其の傑作が含蓄するすべての意見、すべての創意、すべての美に依つて、後人が暗示され、薰陶され、更新されることは、決

して少ない事ではない。今、その大作の面影を、臆氣ながらこゝに傳へる前に、先づ吾人は、ダンテ及びその『神曲』に就いて、さゝやかな豫備智識を有つ必要がある。

(一)

ダンテ・アリギエリは、紀元千二百六十五年五月三十日、以太利のフロオレンスで生れた。父は法王黨の法官アリギエリ、母はその後妻ドンナ・ベルラである。彼が生れたのは、モンテ・アペルトオの戦争最中、即ち父の留守中で、父はダンテが生れると間もなくこの世を去つた。そして彼れは母の手で育てられた。若きダンテの友人には、フロオレンス舊家の一人で、彼れよりは十五ばかり年長の詩人、ギドオ・カワルカンテイや、畫工デヨットオや、樂師カゼルラなどがゐた。彼れがその修養時代にあつて、詩を作る傍ら、他の藝術にも嗜みの淺く

なかつた事が證される。

ダンテは、獨學自修の人であつた。自らその詩中に語つてゐるやうに、ブルネット・ラティニに師事してゐたと言ふが、それは専ら政治の方面で、政治思想を教へられたものと解せられる。けれども、こゝに一つ看過することの出来ないのは、ラティニの著『テゾロ』である。この詩の構想は、神曲の先蹤をもつて目されてゐる。即ち、ブルネットは道を失つて森の中に迷ひ込み、そこで彼れは自然に會ふ。自然は彼れに森林巡回を勧める。彼れは又導師として現はれた古羅馬の詩人オギットに會ふ。これだけでも、吾人は森林に道を失つて、詩人ヴァジルに導かれるダンテの幻想が、こゝに根ざしてゐる事を思ふ。もし、『すべての不幸の中で、その最も甚だしいのは、昔幸だつた事である。』の一句の爲めに、『哲學安慰論』の著者、ボエタイウスを、ダンテの『師』と言ふならば、『テゾロ』の著者も亦その『師』と呼ばれて羨支ない譯である。

(三)

ダンテを説く者は、その初戀、——初戀にして最終の戀であつた、ビアトリスに對する純情を説かなければならぬ。

千二百七十四年、春五月、朔日の祭に、九歳の少年ダンテは、紅衣の少女、彼れよりは一歳年下のビアトリスを垣間見た。彼の女はダンテの住めるあたりから程遠からぬ所に住む、フォルコオ・ポルティナリの娘である。天才の胸に落ちた初戀の種子は、爾後長い間そこに包まれて、歌集『新生』に現はれた地上の戀の花と開き、『神曲』を一貫した、否、ダンテの生涯を貫いた天上の戀の果を結んだ。

それから九年經つて、彼れは又ビアトリスに會つた。その時は最早曩日の紅衣の少女ではなく、同じやうな二人の女の間抉つて、丈高き白衣の身も撓や

かに、町を行く美しい處女であつた。十八歳のダンテは、やる方なき想ひをその小曲に漏らした。これが彼れの詩作の始めである。

けれども、此の幸薄き地上の戀人は、シモネ・デイ・バルデイの新妻となつて、千二百九十年六月の九日、芳紀二十四を數へて、空しく亡き魂の數に入つた。ダンテがその戀歌を集めて、詞書を附し、一小冊子としたのは、その後一兩年のことである。この清新體の歌集を名づけて、『新生』(Vita Nuova)と言ふ。

(四)

ビアトリスがこの世を去る前年、即ち千二百八十八年の六月と八月とに、ダンテは二度、戰場の人となつた。初めは六月の十一日、カムパルデイノオの戦ひに、アレツツオの反對派を撃ち、後のは同年の八月、カプロナの圍みに馳せ加はつた。人は彼れが干戈の間を通つて來たことを記憶せねばならぬ。

ピアトリスの死後、彼れは、哀傷やる方なき心を他へ向けた。それは、彼れの他の戀人たる、哲學に向けたのである。即ち、彼れが二十六才の時、シセロの『友情論』、及びボエティウスの『哲學安慰論』を繙いた。彼れが修養はその年少時に於いてよりも、成年以後に於いて、自ら力取したものと傳へられてゐる。ダンテが學殖見解等は、その未完の著『饗宴』(Il Convito)の中に窺ふ事が出来る。

(五)

ピアトリス没後二年、即ち千二百九十二年、ダンテはマネット・デ・ドナテイの女、ゼムマ・デ・ドナテイと結婚した。夫妻は數子を擧げた。ダンテは中の一女をピアトリスと名づけた。その娘は後年、尼となつた。ダンテの妻女は温良な家婦と稱する外、特に傳はつて居ないやうだ。ダンテが追放された時に、彼の女は良人に従はなかつた。未だ幼い子女の養育に急しかつたのである。ダン

テの追放を語る前に、順序として、當時の政界の模様を少しく知らなければならぬ。

希臘羅馬の後を承けて、以太利はすべての方面に發達した。タスカニアの一市都であつたフロオレンスも、すべての方面に於て膨脹して來た。そして市民と北方から來た貴族との間に、衝突を見るに到つた。羅馬法王方、即ち市民側のグエルフ(法王黨)と、獨逸皇帝方、即ち北方から來た貴族側のギベリンとの間に、衝突が絶えなかつた。ダンテが從軍したのも、この兩黨の戦争なのである。その後、法王黨が兩派に分れた。一方をビアンキ(白黨)、他方をネリ(黒黨)と言つた。是等の多くは政戦と言ふよりも、多くの私情から軋轢したのであつた。

そして、千三百年、長官に撰ばれたダンテが幸福な時期も、東の間に失はれて、彼れの留守中、居所は反對黨の爲めに圍まれ、財産は沒收されて了つた。

ダンテは償金を出した上に、二年の所拂ひを宣告された。それは千三百二年の正月二十七日の事である。同年三月、教唆の爲めに火刑に處せられようとした。それから彼れは、『他人の食の口に苦く、よその階段の登りぐるしきか』を経験する身となつた。その後、身を終るまで、ダンテは膝を屈して故郷に入るを厭きらとしなかつた。そして夢寐の間にも、忘れず、何時かは再びその土を踏まうと願つたフロオレンスの地も、アリギエリ家の名譽には換へ難かつた。三十歳まで其處に暮らしてゐた都市を後にして、彼れは其處此處を流浪した。身命を繼ぐ糧と、雨露を凌ぐ屋根とを乞ひ求めながらも、彼れはなほ矜りかな心を捨てなかつた。そして、現世に意を得なかつた彼れは、今やその假借するところなき嚴然たる意志、傲岸狷介、何物をも容れざる情熱、それとは全く反對なる温情優しさの極み、すべて内に抱く限りのものが、不朽の著作『神曲』(Divinia Comedia)に籠められたのである。彼れは現世に於けるすべてを失つ

た。そして未來世の生命を得た。千三百十一年から、千三百十五年に掛けて、漂泊放浪の寂しい旅が續いた。そして千三百十四年に着手してから、ラエンナの地に落着く事を得て、遂に同所で客死した。千三百二十年九月十四日、詩人五十七歳の最期まで、『神曲』は八星霜を重ねて完成した。

(六)

ダンテが漂泊放浪中の事は、明らかに傳はつて居ない。白耳義から、佛蘭西、英吉利までも行つたと言はれてゐる。或は行き疲れて、スペチアの近傍、聖クロオチエ僧院の扉を叩き、ボロニヤ・パヂユアの地を訪れ、エロナの近く、ガルナノオに逗つて、その『淨罪界』を書いたと言はれてゐる。そしてカン・グラデの宮廷に留まつてゐた時、ダンテが通ると往來の女どもが、その憂愁に満ちた姿を見て、『地獄へ行つた人が通る。』と、囁いたと傳へられてゐる。

詩人が求めたのは、實に『寧靜』だつた。『平安』だつた。そして彼れはなほ、ラズンナに落着いて、ギドオ・ノエルロオ・ダ・ポレンタの家に客となつて居たが、ゼニス共和国とポレンタ侯と戦端を開いた時、平和の使節として彼の地に使した。そして、歸ると間もなく病歿した。墓はラズンナにある。二行からなる羅句語の墓銘は、詩人自身に依つて作られたものと言はれてゐる。曰く、

『愛情少なき母親たる、フロオレンスの地に生れて、

故里より追放されしダンテ、こゝに眠る。』——

(七)

ダンテが、ピアトリスに對する高潔にして熱烈な愛は、吾人の想ひも付かぬ南國人の特質である。なほ自然描寫その他に就いて見ても、豊麗な南方の血と、精神とを見ることが出来る。それと同時に、彼れの先祖に北歐民族の血が混つ

てゐると言ふことも看過し難い點である。熱烈にして峻嚴、華麗にして奇峭、彼れのごときは南北の兩特質を兼備へたものであらうか。『神曲』を讀んで行くと、其の殘忍酷薄、思はず巻を措いて、面を蔽はしむるやうな個所があると同時に、一方には又、溫雅優柔、婦女子の情のやうな個所に出會ふのに驚く。

(八)

『神曲』の解釋に就いては、古來から随分研究されてゐる。詩人歿後、幾何もなくして、その註解が書かれたと言ふことであるが、ボツカチオがフロオレンス府の委囑を受けて、講演をしたのが最も一般に知られてゐる。ダンテ自身にも註解を書く意志があつたが、それは實現せられずに止んだ。

『神曲』はいろ／＼な風に註解されてゐる。先づ第一には、題材が題材だけに、宗教的に解される。又、その背景をなしてゐる當時の政治的意味を寓したもの

とも解かいされる。宗教しゅうけう的てき道徳だうとくの寓意ぐういとも解かいされる。けれども、夫等こゝは皆個々こゝの註解しゆげであつて、『神曲』そのものの註解しゆげではない。もし『神曲』が當時たうじの宗教しゅうけう、當時たうじの政治せいざいをもつてその内容ないようとして居るのならば、千歳せんざい不朽ふくの價値かちは含ふれない理わけである。ところが、此こゝの大作だいさくを繙ひもとくと、千古せんこ不磨ふまの或る物ものがあつて、忠實しゆじな讀者しやくしやにもつてゐるもの凡ひんてを披ひ摭しやくする。劇詩げきし的てき構想かうかう、抒情詩じゆじゆし的てき優美ゆうび、叙事詩じゆじし的てき描寫びやくしや——、殊ことに數語すうご若じやくしくは數行すうぎやうをもつてする力強りきやうい描寫びやくしや等らうが、藝術げいゆ的てき價値かちを保たもつ傍かたはら、その内容ないように、寓意ぐういに、『或る新らしい物』が含ふまれてゐる。幾億いくおく萬劫まんけつに亘わたつて、新らしい何か或る物ものが含ふまれてゐる。この意味いみで、『神曲』を諷諭詩ふうゆし、一大諷諭詩いちだうふうゆしであると言いふを憚はばらない。

(九)

『神曲』の腹案はらあんに就ついては、いろ／＼と説せつもあるが、かなり早くからダンテの

詩想しきやうに宿やどつてゐて、それが一生涯いちしゆが、いろ／＼に醗はう酵かうし、釀じやう成せいされたものらしい。前に舉あげた『トレゾロ』と共に、ダンテが愛讀あいどくの詩人しじん、ゾアジルの傑作けつさく『エーネエド』第六卷だいろくにも、エーネアス地獄ちごく巡りめぐりの件くだりがある。又當時またたうじの迷信めいしん、俗信仰ぞくしんかうが、さういふ風潮ふうしやうをもつてゐて、現げんにダンテが幼時ちゆうじに地獄ちごく煉獄れんごく極樂ごくらく三重さんじゆうの見世物けんせぶつを見たことは、かの少年せうねんゲエテが、ファウストの人形にんぎやう芝居しばいを見たと同じ話わたりごとである。希臘ギリヤ羅馬ロマの神話しんわ上の神祇しんぎが、當時たうじの基督教キリストけうから妖怪まじ視しせられた事は事實じじつである。それと同時に、希臘ギリヤ羅馬ロマの神祇しんぎと、基督教キリストけうの惡魔あくまと結び着ついて、或る一種しゆの怪物くわいぶつとなつた例れいも少なくはない。『神曲』中ちゆうに出る怪物くわいぶつ妖鬼まじ等は、多く右みぎやらの變形へんけいをしてゐる。これは無論もちろん二教にけうの混淆こんかうと共に、ダンテ自身みづかみの創造そうぞうも混まつてゐるだらうと思おもはれる。地獄じごくが既にダンテの地獄じごくである以上いじやう、そこへ現あらはれる惡鬼あくまにしろ、何なににしろ、ダンテのものでなくて何なにとしよう、こゝに吾人われらはダンテの偉大ゐたいな想像さうざう方りやうと創造そうぞう力りきとに驚歎きやうたんさせられるのである。



ダンテの宗教思想、神祕思想は、中世の神學等に明るくなければよくは判らないものになつてゐる。夫れ等のことを論ずるのは、この解題の務でないから、今は一切省く事とする。

(10)

最後に一言して置かなければならないのは、ダンテが使つた言語も詩形も、共に獨創のものではない。少なくとも當時の人にとつて、新しいものではない。彼れは羅旬語に鑑みて、母國の俗語を引き上げ、乳母に聞かされた純粹な國語を銑煉して、其の大作をなしたのである。

(11)

以上の諸點は、『神曲』を窺ふに就いては、是非とも知つて置かなければなら

ない事のみである。未だこの他にも、いろ／＼言ふべき事もあらうが、何分、紙數が許さぬので、意を盡すことが出来ない。次に、この梗概は、この大作の萬分一をも傳へ得たかと言ふと、顧みて忸怩たらざるを得ない。徒らに冷索な筋書となりおほせて、構想の妙も、描寫の巧も、充分に知らしむる事が出来ない。けれども、退いて思ふに、それは全譯を企てたところで、至難な業なのではなからうか。この梗概は、その一斑を窺ふ手引として、諸君の前に現はれたまでである。編者はこの解題を書く爲めに、オスカア・クワン、ヘンリー・モオレエ、上田敏の諸氏に負ふ所のある事を附記して置く。

邦文で、ダンテに關する書籍を讀まうとする人は、先づ上田敏氏著『詩聖ダンテ』（金港堂發行）を讀まるゝが可い。同書は今のところ、日本に於けるダンテ學、唯一の書と言ふべきである。

次に柏井園氏譯『ダンテ研究』（警醒社發行）、住谷天來氏譯『詩聖ダンテの教訓』（教文館發行）を参照するが可い。前者はノオトン、後者はデンスモオアの書の反譯である。原著者は共に米國のダンテ研究家である。殊に前者が有名である。

また、繁野天來氏編『ダンテ神曲物語』（富山房發行）、これは坪内逍遙氏監修、『通俗世界文學』の第十編である。この程改訂再版になった、極く碎けて梗概で、頗るよく出來てゐる。

この外に、カアライルの『英雄崇拜論』中に、ダンテの事が出てゐる。本書は土井林吉氏の譯を初め二三種あるから、併せ讀まるゝが可からう。『文學界』に出た平田禿木氏の『ビヤ』を云々した文章等も一讀すべきである。

『神曲』は、兎角宗教的に解釋され易い性質のものだから、外國でも吾國でも、さういふ方面に結びつけられた著書が多く出る譯である。編者は文學的見地か

らしたダンテ研究書が、(よし反譯でも可いから) 一日も早く出でんことを望むて止まぬ。

# 神 曲

## 地 獄 界

伊太利 ダンテ・アリギエリ原著

村 上 静 人 編

### 發 端

人生ひとのよの旅の半途なかば、ダンテ三十五歳の陽春はる、聖金曜せいきんようの前夜ぜんや、直すなる道を取り失  
 ひ、暗くき森に迷ひ入いつた。思おもひ出だした丈だけでも恐おそろしい、その森の荒涼すさまじさは、死  
 もこれには過あやぎまいと思おもはれる許ばかりであつた。どうして迷ひ込こんだかは判わからな  
 いが、道みちを誤あやまつた時は、睡ねむり心こゝろ地ちであつた。漸やうやう夜よが明あけ離はなれると、やがて山の

麓に看いた。さし登る日に道岐を照らされて、夜ひと夜堪へ忍んだ恐れも少し  
 く和み、波打際に打ち上げられた者が、恐ろしい海面を顧るやうに、苦しき  
 呼吸を吐きながら、過ぎ來し方を顧みた。そして歩を踏みしめて嶮岨を歩いた。  
 見ると前面に豹が現はれた。幾度か後へ引き返さうとしたが、春の朝日の麗か  
 に、猛獸の毛皮を輝かすのを見れば、心に希望の念も萌した。けれども、直に  
 頭を擡げた獅子が現れ、鑿く事を知らぬ牝狼が立ち現はれたので、もと來た方  
 へ馳せ降らうとした時、人の影が朦朧として眼に見えた。ダンテは跪いて「陰  
 影にもせよ、人間にもせよ、憐れみ給へ。」と聲高く叫んだ。

『今は人ならねど、嘗ては人でありし者、兩親はロムバルデイの者、國はマ  
 ントア、シイザアの御宇に生れて、アウガスタスの治世に羅馬に住み、アンチ  
 セウスの子エーネアスを歌ひし詩人なり。凡ての悦樂の源泉たる深山へ、何と  
 ては登らぬぞ。』と、久しい沈黙に聲も嘎れて名乗り出た。ダンテは聞くより、

『さては言葉の川の廣やかに流るゝ源泉、ゾアジルの君か。君は吾が師、吾が  
 作家。歌聖よ、護らせ給へ。野獸は吾が血を騒立たしむ。』と打ち泣けば、詩人  
 は見やつて、『この道を行くは危し。眼鏡く足疾き獵狗來つて、野獸を地獄に追  
 ひ入れる迄は。今は餘の道を取りて行くべきなり。吾れに従ひて來よ、吾れは  
 汝が導師とならむ。絶望の歎聲聞ゆる永遠の地を過ぎて、二度目の死に叫ぶ往  
 古の魂を見、幸ある者になり得る望みを抱きて、火の中に甘んずる者等を見  
 む。又その上に登らむと欲する時は、吾れに代りて指導する天上の姫の手に汝  
 を委ねむ。』といふ導師の言葉を力に、ダンテはその後に従つた。

かくて午過ぎ、夕は萬物の上に休息を齎せば、ダンテは來し方、行く先を思  
 うて心も怏れ、巫女シビルに導かれて、地獄巡りをせしエーネアスの雄心な  
 き身は、兎角に逡巡ひ勝ちに見えた。導師はそれと察して、「怏れゝばこそ、あ  
 らぬ野獸も眼に見ゆれ。』と憶病を呵し、往昔のダンテが戀人、今は天上のベア

トリメから頼まれて、助け導いたこの旅は、天上の冥護ある由を説き明して、その勇氣を鼓舞した。ダンテは導師のあとに従つて、荒涼たる途を踏み分けた。

一の一

『こゝ過ぎて歎きの府に、こゝ過ぎて永久の患惱に、こゝ過ぎて滅亡の民に。造り主、審判の爲めに、憐ひなき大慈大悲の、神力これを造りぬ。永劫にたてるこの門の、その前に萬物はなし。一切の望みを捨てよ、此門に入る者。』地獄の門上に記された臙氣な文字の跡も、導師の説明に、漸くその意を解したダンテは、嗟歎働哭の聲、星もない空に響き、大旗を翻して右往左往に走り廻る一群の影を見た。世に在る時、譽れもなく譏りもなく、善にもあらず、悪にもあらず生涯を送つた者、及び善天使悪天使の戦ひの折、袖手傍觀した天使等これに混る。ダンテこれを見て、涙を流したが、導師は、『簡短に語り聞かさむ。

是等は早や、死する望みさへなき者。語るに足らず、只見てのみ過ぎよ。』と。其處を過ぎれば、濁浪滔々たる岸に出た。即ち大河アケロンである。炎の眼の魔鬼カロン、權を振つて遅るゝ者を打ち、岸に屯せる者を小舟に追ひ入れる事、秋の木葉に異ならず。ダンテは乗船を拒まれて、折柄の地震疾風に心を喪ひ、遂にその場へ倒れた。大雷の音に覺めて、力を取り返した人のやうに立ち上れば、何時か川を越して、底なき谷の縁に立つてゐた。

この邊、地獄の第一圈リムボオと言つて、洗禮を受けず、聖教を知らぬ者の居る所で、嗟嘆の風に慄へる許り、働哭の聲を聴かず、痛みなき悲哀に満ちた仄白き野に、詩祖ホオマア、譏刺家ホレエス、オギツド、ルウカンの四詩人に會し、清き流れと、七重の壁を巡らせる城の下に出れば、綠濃き廣野の其處此處には、アトラスの娘エレクトラ、ヘクトル、エーネアス、巨鷲の眼のシイザア、サラデイン等の古人。彼方にはアリストオトル、ソクラテス、プラトオ、

デモクリタス、ディオゼネス、アナキサゴラス、タアレソ、エムペドクレス、ヘラクリタス、セノオン、シセロ、セネカ、幾何學祖ユウクリツド、ヒポクラテス等の哲人學者が居た。ダンテは導師に導かれて、靜かに空氣の慄へる所を出て、何ものも光らぬ場所へと進んだ。

第二圈は邪淫の群の罰せらるゝ所、往時はクリイト王、今は地獄の判官ミノス、牙を露はして罪囚の罪狀を聽いてゐる。叫び歡き悲しむ靈、旋風に吹き廻されて、列なつて寒空を飛ぶ掠鳥の羽音かと疑はれた。こゝに居るものは、アレリアの女王セミラミス、カルセエジのデイドオ、埃及女王クレオパトラ、トロイ戦争の因たる美姫ヘレン。男では敵の王女に心奪はれて毒箭に中つたアレソ、ヘレン姫を誘惑したパリス、伯父のアイソルトに戀して、毒矢に命を落せしアアサア王の騎士トリスタン等、中にもラゼンナの太守ギイドオ・ダ・ポレンタが娘フランチェスカは、敵なるリミニの太守マラテスタの息ザアンチオツ

トに嫁いだが、新枕の夜、明け離れて、添臥の男を見れば、似ても似つかぬ醜男なものも道理、良人の姿に立出つて見合ひに来たのは、ザアンチオツの弟パオロといふ優男、フランチェスカは此のバオロと物語るのを、上なき樂みにしてゐたが、ひと日ザアンチオツの留守に、二人がひと間に籠つてゐると、僅僕の密告に依つて、立ち歸つた良人が短劍の尖に、二人は命を陥したが、幽明界に来てまでも、双ひ離れぬ斑鳩の、美しき巢に飛び行くが如く舞ひ來り、ダンテに向つて、悲しき戀の物語をした。ダンテ重ねて、道ならぬ戀の始をうら問へば、

『憂き時に、樂しかりし折の事を思ふより、悲しきことはあらず。ひと日騎士ランセロツトと、妃ギネギアの戀物語を読み居つるが、四邊に人もなく、唯二人、眼を見交し顔色變へ、やがてガレオツトの媒ちにて、高貴の戀人等が接吻する高潮に讀み到りて、この人は、慄へながら、吾が口に接吻したり。この

物語と其の作者は、吾等が爲めのガレオットなり。巻を措きて、其の日再び讀まず。』

靈かく語る間、傍なるパオロの影は、只管涙に咽んでゐた。ダンテ悲しみの餘り失神して、死骸のやうに打ち倒れた。

心づきて起き上れば、身は第三圈の汚き雨降る中にゐた。此處は貪食の徒の罰を受くる所で、地獄の番大セルベラスが、三箇の頭を振り立て、三つの咽から吼えてゐた。水溜りの中から、豚と呼ばれたフロレンスの大食者、ダンテの姿を見るより呼び止めて、故國の騷亂を論じた。なほも濁水を徒涉つて行くほどに、『パペ、サタン、パペ、サタン、アレツペ。』と、魔鬼プルウトスの罵るを、『黙れ、狼。』と導者が一喝すれば、一杯に風を孕んだ帆が、橋柱の折れしに萎み落つる如く地に倒れた。

第四圈に降つて行くと、數多の罪囚二派に分れ、圈の兩端から大石を轉がし

ながら突進して、中央どころで衝突すると、『何故蓄るの』『何故費ふの』と、口々に罵り合ひ、取つて返すかと思ふと、又もや喚き叫んで衝突した。是れは是れ、世にある時の浪費者と貪慾者の絶え間なき諍闘で、後者の中には高僧智識も混つてゐた。猶降つて行けば、濁水ステイツクスの大沼となり、憤怒に身を滅せし裸牀の罪囚、泥に塗れて相噬ひ、相裂いてゐた。

ダンテは導師に導かれて高い塔の下に來た。未だ行き着かぬに、二道の狼火が上ると、それを相圖に悪鬼フリージアス、矢を射る如く小舟を漕ぎ寄せたが、ダンテの生身なのを見て憤つた。けれども、導師と二人小舟に乗り移れば、悪鬼は大澤の上へ漕ぎ出した。『未だ來るべき時ならぬに、來りし者は誰ぞ。』といふ聲して、泥に塗れた影が、ダンテの前に現はれた。『吾れは、來たればとて、此處に止まらず。穢しくなつたる汝こそ誰ぞ。』と問ひ返せば、『見らるゝ通り、泣く者なり。』と答へたのは、アマデイの舊家フィリツポ・アルゼンテイ、傲岸自

尊そんの聞きえ高たかき人ひと。地獄じごくの旅たびに、憐愍れんみんの情じやう漸しんく薄うすらいだダンテは、『泣なき悲かなしむで、こゝに止とどまれ。刑罰けいばつ汚むじしとは言いへ、吾われよく汝なを知しれり。』と言いつた。舩ふねに手てを掛かける影かげを叱しかつて、導師だんしはダンテの鐵石心てつせきしんを讚たえた。『師しよ、この沼しづを渡わたらぬ先まに、渠濁水かねたぐすゐに漬つかりたらば、如何いか許かり面白おもしろからむ。』と、ダンテはかう答こたへた。

111

陰府よみの城しろ近ちかづき、朱あかの尖塔たふが見みえ初はじめた。フリジアスの小舟こぶねを出でて岸きに上あると、墮落たらくてんし天使てんしがダンテの城門しろかどに入いるを拒こむだ。朱あかの尖塔たふからは三人さんにんの魔女まぢま、大蛇ドラの帶おびして、小蛇こへびの髪かみをおどろに振ふり亂みだし、『メヅウサよ、彼かれれを石いしに化かさむ。』と叫こゑんだ。醜怪しうくわいなメヅウサの面おもてを見た者ものは、石いしに化かれば、眼まなこを閉まぢて見みぬやうにと、導師だんしは手てもてダンテの眼めを蔽おほふた。その時とき、一人ひとりの天使杖てんしじやうを持もつて天降あまくだり、衆魔しうまを追おひのけて、容易たやすく城門しろかどを開ひいて二人ふたりを通とほした。

第六圈だいろんは、古戰場ふるやばに似にたる廣野くわろやの此處こゝ彼處かゝに、焔ほを噴ふく墓はかの壘るみ々々たるは、異端邪教たんじやけうの葬はふられた所ところである。打うちち語ごりゆくダンテの語音ごおんを聞ききて、訛なまりは確たしか吾われが故郷こきやうなるタスカンの人ひと、生いきて語ごり行いくは誰たれれぞ。』と、墓はかから半身はんしんを現あらはしたのは法權黨ほふけんたうの勇將ゆうじやうフアリナタ、反對黨はんたいたうなるダンテの先祖せんぞを訊たねし後のち、『彼等かれらは吾われれに、吾われが先祖せんぞに、吾われが黨たうに敵對てきたいしたれば、吾われ二度どまでも追おひ散ちらしたり。』と言いふ。ダンテも黙だまつてゐず、『二度どまでも追おひ散ちらされたれど、二度どまでも盛もり返かへしたは、お身等みらの知しらぬ術じゆつなり。』と罵ののし返かへせば、傍かたわらなる一つの影かげ、願ねがひ出でして様よう子を窺うかがつてゐたが、泣なきながらダンテに向むかひ、『詩才しさいの高たかきに依よりて、君きみ、此こゝの暗くらき圍園ゐとやを行いき給たまふならば、吾われが子こは何處どこに。何故なにゆゑ君きみと共に來きたらざる。』と問とうたのは、ダンテの親友しんゆう、同じく清新體せいしんたいの詩人しじんガイドオが父親ちち、カザルカントであつた。『吾われれ一人ひとりにては來きらず、彼處かゝにあるは吾われが導師だんしなれど、君きみのガイドオが輕かろんじたりし人ひとなり。』と答こたへると、『なに、輕かろんじたりしとは、吾われが子こ



も亡人となれるか。美しき日光、その眼に射さざるや。』と、仰向に倒れ伏して言葉もない。その間にあつても、形をかへず、首も顔色も動かさぬフアリナタが、言葉を繼いで、『吾が黨の者等、戦術を知らずとは、今の苦患より吾に取りて苦しきを。』と嘆いた。

城壁を離れて進めば、斷崖峻しく、底暗き谷の縁に、大きな石碑が立つてゐた。碑文を見れば、『フォオチナスに惑はされて、正路を失へるアナスタシアス法王、こゝに眠る。』とある。谷間より立ち騰る臭氣堪え難きまゝ、この碑の陰に憩ひて、ダンテは導師から罪の區分を聞き、夜の明ける頃、崖道を傳つて下へ降りた。第七圈への下り口は、岩石碎け落ちて、アルプスの嶮岨もかくやと思はるゝ許り。クリイト島に諸人を恐れさせたる人頭牛身の怪物ミノタウル、兇暴な様にして立ち塞るを、導師一喝すれば、致死の打撃を受けた放牛のやうに、踰る隙を、つと通りぬけて、第七圈へ下り着いた。

下なる血の池には、朱に染まつて、沈淪する者數知れず、岸には、人頭馬身の怪物ケンタウル、弓矢を取つて罪囚を威嚇し、息吐く隙も與へない。ケンタウルの首キロンは、部下のケンタウルで、かのヘルクレスの妻女デヤニイラに懸想して殺されたネサスに吩咐けて、二詩人の爲めに淺瀬を教へて渡らせた。渡りかけて、池の中を見れば、歴山大王を初めとし、同胞を害した暴主、刺客數多、血潮の中で苦しんでゐた。こゝを過ぎれば、自殺者の樹木と化した林に入る。枝の上には女面鳥ハアピイが巢を掛けて、この不思議な樹木を吼んでゐた。導師の言に、手を伸べて一枝を折ると、『何とて吾れを裂くぞ。』と、裂目より、語が血と共に走り出た。これは、シシリイ王フンデリク二世の大老ビエル・デルラ・ギイニエ、晩年幽閉せられて、絶望の餘り自害した人と、其の言ふ所で判つた。ふと左手の方の騒がしきに見れば、棘に搔き裂かれた裸の影二人、猛き牝狗の群に追ひ詰められ、牙に掛かつてずた／＼に引き裂かれた。シ

エナの人ヲノ、パツアの人ヤコボ、共に破産して身を殺した者が、かゝる責苦に會ふのであつた。

林を出て、行くほどに、乾きたる熱砂の上に、裸體の影の罪に依つて、或は仰向に打ち倒れ、或は躊躇り、或は絶えず歩き廻るあり、仰向に倒れたるは、神を瀆したる瀆聖者、靜かに蹲る者は、高利を食つた者、絶え間なく歩き廻るのは、人倫を亂した罪囚であつた。アルプスの夜の雪にも似たる、しとゞに降り注ぐ火の雨、猛火の責苦にも撓まず、『死せる後と雖も、生ける日に變りなし。』と、不敵の狂語を吐くは、シーブスを圍んだ七人の王の中、傲慢不遜の力パネウスであつた。

一語もなく、砂原を抜けると、赤き流れが、樹間から迸り出てゐた。その色の恐しさは、ダンテの髪を逆立たせた。導師やがて、地獄の河川の由來を明かして曰く、

『海中に島あり、クリイトと言ふ。島の上に山あり。イダと言ふ。昔者レア、子を喰ふ父サタアンより、その子ジュピタアを隠して、この山に育てしとか。今は荒れ果てたる嶺に、巨軀の老翁ダミエツタに脊を向け、鏡に向ふ如く、羅馬に向ひて立てり。頭は純金、胸と腕は純銀、腹は黄銅、それより下は精鐵、右脚のみ、窯に焼かれたる土よりなり、其の足には全身を支へて立つ。黄金の頭を除く外は、胸にも脚にも罅ありて、涙ながれ出で、地獄に入りてアケロン、ステイツクス、及びフレグソンの三河となる。濁水流れ下る果は、地獄の底なるコシタスの氷の大沼に終る。』と。

流れに沿ひて堤を行けば、河原を通る影の一群、たとへば新月の夕暮に摺れちがひながら、透し見るが如く、老人の裁縫師は、針穴を覗く眼付して、對人を眺めてゐたが、やがてその中の一影手を伸べ、裾を捉へるのを見れば、姿形は甕れたれど、紛ふ方なき舊師ブルネット・ラティンである。『こは如何に。師

の君、此處に在すか。』と、ダンテも驚く。瞬時の低徊も百年、佇立の罰を受くれば、ブルネットの影は猶歩き續けて物語る。この群の中には、伊太利有名の人士少なからず。やがて夫れ等の人々も別れて行けば、第八圈にたぎり落ちゆく水の音が、蜂窩の眩きのやうに聞えた。

赤き水の流れ、瀧つ瀬となれる下には、ブルネットの如く、人倫の自然を害ふた罪囚が、血の雨を浴びてゐた。道きはまり、斷崖高く聳つ端に立てば、眼も眩む許りなるに、導師はダンテの帯を腰より切つて投げ込ませた。谷底の霧を分けて、ゲエニオンといふ蛇體の怪物、首は優しい人の面をして、長い毛を振り亂したるが、ダンテの眼前へ現はれた。導師進み出で、怪物にも言ひ掛けてゐる隙に、左方の岩を降りて、哀れなる罪囚の居る所へ行けば、そこなる岩蔭には、高利を貪り、貧民を苦しめたるもの、定紋つきし財布を首に掛けたる名家の人々、夏季、蚤蠅に苦しめらるゝ犬の、口や足もて虫を拂ふごとく、

落ち散る炎の雪を拂ひ、熱き涙を流して歎く。導師は逸早く怪物の脊に乗り、ダンテを塵く、ダンテ恐ろしさに慄へながら、同じく怪獸の脊に登れば、ゲエリオンは大船のめぐるが如く、第八圈の岩根に降り着いた。

### 一〇三

第八圈は、欺騙者の罰せらるゝ所で、マレボルゼ即ち毒坑といふ。十の濠には、其の罪に依つて區分されたる罪囚が、各自責苦を受けてゐる。

一の濠は、自身または他の爲めに、婦女を誘惑した赤裸の罪囚隊伍を組んで、角ある鬼に鞭撻たれて行く。中に一人、面伏せ氣味に歩み行くは、ボロニヤ人エネデイコ、フアルララの侯爵に取り入らうとして、美しの妹を牲にしたえせ者。『歩め、岡戸、此家に賣女は居らぬぞ。』と、鬼に引き立てられて行く。ダンテ行く事暫くたして、レムノス島の婦女が、男子を皆殺しに爲ようとした時、父

エトアスを助けた王女ヒブシリイを、この島に上陸した時誘惑して、孕ませ  
て、捨て、行つたデエーションがゐた。

第二の壕は阿諛者の罰せらるゝ所、糞泥の中に埋もれて、姿も見えわかず、  
只佞辯飽かざりしルツカのアレッシオと、髪振り亂せる遊君タイスを見て過ぎ  
た。

第三の濠は、法職賣買の罪囚の居る所で、ニコラス法王を初め、倒まに石の  
穴に立てる罪囚の足のみが見えた。

第四の濠には、セエブス攻めの時、自らの死を前知して、出陣を拒んだが、妻  
の爲めに計られて出陣し、戦の間に、土中に陥つた易者アムファイフレアスを初め  
人を惑はした巫女占星師妖術師等、狼りに未來の秘密を明した罪に依つて、面  
は皆うしろ向になり、涙を脊に流して、後退りしてゐる。

第五の濠は、職權を笠に着て、收賄した俗吏の獄、瀝青の池に溺れて苦んで

ゐた。悪鬼等、水中より、亡者を掴み上げて裂かうとした。獺のやうに吊り上  
げられたのは、ナヅル王の家臣チャムポオロ、老獺の辯舌には、悪鬼をも嘯り、  
その釣を免れて、池中深く逃げ込んだ。

第六の濠は、偽善者の居る所、鍍金の衣燦然として、重たげに歩く輩は、裏  
に鉛の厚きを荷ひ、踰越として岩道を辿る。中にも猶太の高僧ケエヤフアスは、  
裸身に杭を打たれ、地面に磔刑の厳しき罰を蒙り、人の踏み行くに任せてある。  
この先の谷間には、濠に渡せる岩の棧橋も絶え、通ふ道もなしと言ふに、導師  
の頼も曇つたが、一歳、未だ若き春の頃、日は寶瓶宮に髪を浸し、夜も平分に  
近づきつゝ、置く霜白き姉の姿を地に寫せど、筆づかひ拙なき折ふし、牧草に乏  
しき農人の、朝に起きて、打ち出で、白く輝く野面を見やり、脇腹たゞき家  
に歸り、爲すこと知らぬやうに歎きに沈んだが、少時して、戸外を見れば、早  
や世は面目を改めたので、再び希望を得、杖を手にして、羊を牧場に追ひ行く

が如く、導師はダンテを勵まして、崖路を傳つて行つた。  
 第七の濠は、暗き中に、草賊、大盜、皆蛇身となつて蟠まる。聖ヂエームス  
 蛇の寶藏に忍び入つたピストイアの貴族ヅンニ・フツチは、毒蛇の縛めに焼けく  
 づれ、灰となり、灰集つて、又舊の形をなし、又毒蛇に縛めらるゝこと、小止  
 みなく繰り返す。

第八の濠には、火柱燃え立ち、權謀術數を事としたもの、炎に包まれて、苦  
 しんでゐる。木馬の中に戰士を入れて、トロイを攻め滅ぼした詭計の爲めに、  
 こゝへ落ちて來たイサカの智者ユリセス、同じくディオメエドを初め、軍師策  
 士の群れが、此處で罰せられる。

九番目の濠には、反間者分派煽動者の多くが苦しんでゐた。回々教祖マホメ  
 ットは、その甥アリと共に、肉を裂かれて放浪ひ出た。

最後の濠には、煉金術士、貨幣偽造者毒氣に中り、惡疾に苦しんでゐる。外

にも、未だ欺騙者が惡疾の罰に會つて、罵り喚いてゐた。ダンテがその叫喚に  
 耳傾けてゐると、導師は『それを聞くは、賤しき者の楽しむところ。』と戒めた。

## 一の四

悲みの谷に脊を向けて、二詩人は黙々として地獄第九圈に向つた。一步先き  
 も見え判かぬ暗き中に、角笛の音鳴り渡れば、ダンテ驚きて行手を見るに、黒  
 き塔の立てるを、いづれの都市ぞと導師に訊ねた。これは、巨人の幽閉される  
 所、塔と見えたはバベルの塔を築いて、神にも優る者に成らうとした巨人ニム  
 ロッドが半身を現してゐたのである。左に曲ればオツサ、ペリオンの二山を積  
 み重ねて、天に登らんとした海神の子、エフィヤルティイズが、双手は鐵鎖に縛  
 められながら、大地震うたせて身動いでゐた。ヘルクレスと力を角して、空中  
 で絞殺された地祇の子アンテウスも此處に居たが、彼れは二人の詩人を、底

つ岩根に下した。

地獄の河川、すべて流れ入るコシタスの大沼は、永劫の氷に閉ぢられてゐる。この中には四種の罪囚が禁られてゐた。

第一の淵は、カイイナ、弟アベルを殺したカインに依つて名づけられ、骨肉を害つた者こゝに罰せらる。

第二の淵は、アンテノラ、トロイ城中より敵軍に内通したアンテノラに依つてこの名がある。即ち賣國奴の獄である。

行くこと少時にして、ダンテはくぼめる岩穴の中に、二つの頭打ち重りて、一つは飢ゑて麵包を貪る如く、齒を顯はして、他の頭を噛んでゐた。ダンテ怪みてその故を問へば、上なる頭口を離し、噛みたる頭の髪にて唇を拭き、扱語り出だすやう。

『君が問るゝ事を思ひ巡らすのみにても、語らぬ前に吾が心傷む。只吾が詞

の種子落ちて、今咬み裂ける、此叛逆人の汚辱を示す實を結ぶこともやあらんと、語りつ泣きつ君に示す許りぞ。君は誰れなるか。如何にしてこゝに來りしかは知らざれど、語を開けばなつかしきフロオレンス人なり。吾れは伯爵ウゴリノにて、又是れなるは、大僧正ルツジエリなるを。この惡漢を信ぜし許りにて、かくは淺間しき姿とはなりぬ。吾が爲めに、忌はしき餓鬼塔の名を得しピサの塔上に幽閉せられし日の曉、これなる大僧正、配下の三將に獵犬を狩り立てさせ、ピサとルツカの間の山にて、大小五頭の狼を殺したりと見し夢に驚き、眼覺むれば、夜は未だ全く明け離れぬ囹圄の隅に、夢の中にも、糧を求むる呻き聲あはれに睡れる子二人、孫二人、朝風に起き出で、語るを聞けば、同じく見たる夢は割符を合はす如く、各自災禍の身に及べるを知りて、恐るゝ事大方ならず。やがて朝食の時刻來たれど、糧運ぶ獄卒の足音は聞えて、下なる戸の鎖さるゝ音を聴きぬ。吾れ詞もなく、子等の顔を見ぬ。吾れ泣かず、心石と化り

たればなり。子等は打ち泣けり、最幼の孫アンセルムは、「祖父上、何を見たまふ。何を悲しみたまふぞ。」と問ひしが、吾れ涙もなく、答へもせて、その日過ぎ、その夜も過ぎぬ。明くる朝の光、臙氣に、悲しき圍圍の裡にさし込みし時、吾れ、四兒の顔にも、吾れと等しき顔色の登れるを見たり。痛恨の餘り、双手を噛まんとすれば、餓に迫りて手の肉を喰ふかと思惟し、不意に立ち上りて、「吾等の肉を喰ひ給へ。君自らこの憐れなる肉を與へ給ひぬ。今それを剥ぎ給へ。」といふ。自ら心を静めて、子兒を悲しましむる事なかりしが、その日、吾等はもの言はず、次ぎの日も亦。かくて四日目の朝、「父よ、など吾れを助け給はぬ。」と一語を残して、年嵩の息ガツドオ、一父の膝許に斃れしより、五日目と六日目の間に、他の三兒も次ぎ次ぎに失せぬ。吾れ、この時、患惱に眼盲ひて見えず、漸く手探りて屍骸の上にかぐみ、三日の間、その名を叫び続けしが、悲しみの爲め爲えぬ事をも、飢はこれを爲し得たり。』

涙の中に語り終りて、犬の如く齒牙を鳴らし、下なる頭蓋を噛み碎く。義憤のダント、ピサの人民を罵りて止まず、歩を移して第三の淵に至る。こゝは賓客を害ひし者の罰せらるゝ所で、シモンと其の子等を、宴席に事寄せて殺したトレミイに囚んで、トロメアと言ふ。菓物を殺害の相圖として、兄弟を殺めたフエエンサの修道士アルベルゴ、養父を害したブランカ・ドリア等がこゝに居た。『奈落の大王が旗は近づきたり。』と、導師の語に、はじめて地獄のどん底、コシトス大沼の末、君を弑し、恩人を賣りし者囚はれたる、第四の深淵ヂユデツカに來たのが判つた。ヂユデツカの名は、主を渡せるイスカリオットのヂユダスに因む。罪囚あるひは臥し、あるひは起立する中にも、往時は七天使の中の花と謳はれたる大魔王セエタン、永劫の結氷に半身を閉ざされて、大鵬の翅も空しく垂れ、三面に恐恨を現はし、六眼に血涙をとどめ、赤き雫は三つの頤に滴つた。いかなる船

の帆も、斯く許り大きなものはないと思はれる其の長翅は、羽毛を付けず、蝙蝠のそののやうに、一面に綾文がある。魔王ひと度翅を振へば、三風忽ち吹き起つて、全コシタスの沼をも、氷をもつて閉ざす事が出来る。三つの口は熊手の如な齒牙で、三人の罪囚を噛み裂いてゐる。其一人は救世主を賣つたイスカリオットのヂユダス、二人は帝國主義に反したブルウタス、カシアスであつた。ダンテは恐ろしき堪へがたきも、導師の手引きに依り、大魔王の體毛に縋り、脊に攀ぢのぼり、地心の彼方、ヂユデツカと反對の方に出来れば、すさまじき地獄は背向になつて、間道より再び耀かしき世界に戻るべく、導師を先きに、ダンテはその後に従ひながら、美しき大空の光り、夜の明け離るゝごとく、天上の洞を透きて見え初むるまで、休息の念もなく登りに登つた。かくて再び星を見た。

## 淨罪界

### 二の一

さても、二人の詩人は、すさまじき地獄の毒海を後にして、人間の靈魂自ら清まり、昇天の資格を備ふるに至る、第二の領淨罪界へ向つた。東の方、青玉の美しき色彩は、雲のあとなく晴れ渡つた澄める空に廣がつて、第一天の高きに及び、仰げば、眼に見ること、心におもふこと、一つとして、悲哀の種ならぬはなかつた恐ろしい大氣を脱して、眼は喜悅に新たなるを覺えた。戀をおもはする朝の明星は東天一帯を笑はせ、伴なる双魚宮の光を蔽つた。ダンテ右手の天を眺むれば、人類の祖先アダム、イヴの外、未だ嘗て何人にも見えなかつた四箇の星は、その光に天を悦ばせ、彼方の空には北斗のかげ淡れて、既に見えずなつてゐた。



ダンテはふと傍に立つてゐる一老翁を見た。その顔容は、深慮、正義、剛毅、節制の四箇の星の光に照らされて、氣高く見えた。これこそ古羅馬の愛國家、一生自由の理想を抱いてゐたアティカのケエト、今は淨罪界の守護者、二詩人即ち煉獄巡禮の許可を得て、その訓示を聴き、低地へ下つた。今や夜まつたく明け離れて、朝日花やかにさしいで、曙の光はさきなる朝かげを逐ひやつた。ダンテは遙かあなたの海の慄へるのを見た。さて、二人は淋しい野に降り立つて、導師は静かに、日に諍ふ草の露の上に手を擴げた。ダンテは地獄巡りに汚れた頬を濺ぎ、岸邊に行きて忍辱謙讓の象なるひと本の芦を腰にまいた。日すでに頭を擡げて、曙の女神オウロラが白く赤みを帯べる頬の色も、漸うねびまさりて黄色に變れど、ダンテは心はやりながら身體これに伴はず、道のゆく手を思ひやる旅人のやうに、猶海の岸に立つてゐた。折しも一道の光射すよと見る間に、熾耀たる翅を廣げた天使の、一百の靈どもを小舟に打ちのせ

て飛び来る。『急ぎ跪け、天使の船ぞ。』と、導師の語に跪けば、舟早や岸に着きて、靈は陸にのぼる。その中の一影ダンテを見て、親愛の様を見せた。近寄りて打ちまもれば、風交厚かりしフロオレンスの樂人カツセラ、世にありし頃の友誼をおもひ、『心の裡にして、吾れと語らふ戀の君。』と、ダンテの作を唱ひ出せば、導師をはじめ其處にある一同の人、いと満足氣に佇んでゐた。『こは何とせし。早く登獄の願ひを果して、身心脱落、神を見ずや。』と呼ばはるは、正しくケエトの聲に、餌を見すて、飛び立つ鳩のやうに、靈どもは飛び去つた。ダンテは導師に従つて、淨罪山麓の嶮しい坂みちを攀ち登つた。足許覺束なくためらふ折ふし、ひと群の影の過ぎゆくに會ひ、道を問へば、額に刀痕ある一靈、ダンテを見て、『吾れを見覚えてありや。』といふ。アラゴン女王コンスタンザの孫、ネエプル王マンフレディ、一とせbeneventの戦に討死して、橋の袂に葬られたが、破門されたる者なればとて、ヴァアの川岸に改葬された靈

であつた。

なほ登り行くほどに、道いよ／＼極まりて峻しきに、喘ぎ登れば、漸くにして平坦なる所に出た。懈怠に身を任せて、命終の際まで悔ひ懊めざりし靈、岩かげに爲すことなく立つてゐた。中に一人疲れたる様して、跼める膝を抱き、その間に顔さし入れてゐたが、股の上に眼をあげて詩人を見た。

『男々しき人よ、先きへ行き給へ。』

といふのを見れば、フロオレンスの琴師ベラツクワであつた。

『何とて此處には止まれる。伴をや待てる。さては性來の怠け癖か。』

ダンテがそこに佇むを、導師傍より促して山路をいそぐ。

次ぎの山間は、横死の際まで悔い懊めざりし者の居るところ、一群の影の中より進み出でたるは、モンテフェルトロのブオンコンテとて、カムパルデイイノの戦に殲れた勇士だ。

『吾れ失せしとて、吾が妻ジオヅナならでは、誰れか非、まんや。亂軍の間に吾れ咽喉を刺し通され、足許も踰踏と、四邊の草芽を血潮に染めなしてよろめくうちに、眼くるめき、聖母の御名を呼ぶ一聲に締切れて、吾れは打ち斃れ、屍骸はそこに止まりぬ。天使、吾が靈魂を取り給へば、冥府の惡鬼怒りて叫ぶらく、「天上の者、何とて吾れより盗み去るや。彼奴が永遠なる部分を取り去れり。まこと涙のひと雫は、吾れより彼れを奪ひたり。よしさらば、仕様こそあれ。」と、靈を呼び、大雨を降らせ、瀧つ瀬の流れをもつて、冷たき屍體をアルノ河中に押しながせば、胸の上にて十字に組みたる吾が兩腕も解け、或る時は堤にあたり、又或る時は水底に轉がりて、土砂は吾れを蔽ひ、吾れを包みぬ。』

と、語る傍より、次ぎなる影は口をひらきて、

『あはれ、現世へ歸らせ給ひ、長き旅路の疲れ癒えたるの時、君よ、ピヤなる妾を想ひ出させ給へや。シエナわれを與へ、マレムマわれを奪ひぬ。玉の指

輪をこの指に穿たせ、妾を初めて娶りたる人こそ知れ。』

と言ふは、ピエトラの大守ネルロの妻、良人の疑ひにより、マレムマの城の窓から投げ落されて、命を墮した薄命の婦人である。

諸靈數多行きちがふあたりを抜けて、なほも山上に歩みを運べば、夕日影長き頃、唯一人立ちて、此方を眺むる靈が眼に入つた。淨罪界の門へは、いづれへ行くやと問へば、その影、導師の生地を訊ねて、

『なに、マントアとな。吾れも同國の生れ、ソルデロと言ふ者なり。』  
と名乗り、改めて訊いた。

『おん身は誰れぞ。』

『吾れはゾアジルなり。』

導師の答に、かつ訝り、かつ驚き、

『おゝ、拉典の榮譽、君ありて、吾等が國語の力示されたる人。おゝ、吾が

祖國が永く誇りとなさん。』

と賞揚した。

その夜は、ソルデロの案内に依つて、美しい園に導かれた。そこには、古今の名主賢君が、淨罪全き日を待つてゐた。

朝に親しき友と別れて、海を行くものは、羈愁うたゝ心を溶かし、また初旅の巡禮者が、落日を悼むやうなる遠かたの鐘を聞きつ、戀にこゝろも揺めく頃となつた。一靈ありて、晩の祈禱をあぐれば、皆々これに附きて、東の空を拜する折から、青葉色なる衣を纏うた天使二人、二口の焔の劍を振つて、天降つた。これはこれ、聖母の御胸より天降りました、惡蛇の守護神である。

『吾等人間の仇敵は彼處に。』

と、指す方を見れば、草と花との間を分けて、イヴに苦き果實を喰はせた惡蛇が、この脊さして襲つて來た。天使が焔の劍を振つて立ち向へば、惡蛇は恐

れてあとへ歸つた。  
 夜明け、燕の歌きこえ初むる頃、ダンテ夢に、金色の羽毛の大鷲飛び來り、  
 吾れを攫みて空高く舞ひ上り、天上の焔の中に入ると見て覺むれば、導師の傍  
 にゐた。

『天女ルシアの冥助に依り、早くも淨罪界の關門に着きぬ。』

と、いふ導師の言葉に心落ちつき、彼方を見れば、日のぼりて二時許り經て  
 る光に輝きたる石門の立てるあり。三つの階段の下なるは、滑らかに磨かれた  
 る純白の大理石、次ぎなるは黒く割目ある石、上なるは血紅色の斑石、金剛石  
 の扉口の上には、淨罪界の入口を守る天使、劍を持つて坐してゐた。天使は劍  
 の純き刃先で、ダンテの前額に七箇のPの字を記した。これは驕慢、嫉妬、忿  
 怒、懶惰、貪慾、飽食、邪淫、即ち七箇の煉獄で償はるべき七箇の罪惡の記で  
 ある。又、天使は金銀二つの鑰をもつてゐた。金は權威、銀は智識に象る。さ

て、『神をたゞへまつらむ。』の讃頌と共に鐵の扉は開かれた。

## 11011

石門の扉閉さるゝ反響を後に聽いて、ダンテは岩間に起き伏す山路を辿りゆ  
 けば、淨罪界七つの平の一つ、驕慢の罪の償はるゝ場所に出た。

大理石の壁には謙讓の美德を顯はした彫刻、希臘の名匠ポリクレタスも舌を  
 捲くやうな自然の妙技に、ダンテは心引かるゝ折しも、導師の聲に心づいて、  
 そこらを見れば、大きやかなる石、數多搖ぎ出で、自と歩むを熟視するに、驕  
 慢の靈ども、罪の大石を肩にかつぎ、胸と膝とをひとつにして、踰跟いてゐるの  
 であつた。

家門の高さに誇つたサンタファイオルの伯爵オムベルトが、尊大に構へた爲め  
 に、シエナ人に殺された靈が此處にゐる。又、チマブエ派の小畫家、アゴツピ

オのオデリジが、藝術に、つた靈も此處にゐる。オデリジの靈はいふ。

『儚なきは人の力よ。何時までか残らむ。まことに浮世の聲名は、風の息吹に異ならず。』

と、只管往時を悔いてゐた。

輒に喘ぐ手のやうに、ダンテは導師の手引きを力に、猶進みゆくと、

『伏して脚の下を見よ。』

といふ語に、岩の面に眼を止むれば、自負傲慢の輩の、罰せらるゝ様を刻む。大魔王セエタンの墮落を初めとして、神々に仇なせる百頭の巨人ブリヤレウスが、雷に打たるゝ所、バベルの高塔を建てんと企てたニムロド王、七人の娘、七人の息子の美に誇つて、ラトオナの怒りを買ひ、子供を失つた悲みに、石となつたシープスの女王ニオベ、女神ミネルガと、機巧みを争つて、蜘蛛にされたアラクネ姫、シープス攻七王のうち、自らの死を豫知して隠れたアム

ヒアラウスの在所を發いて、吾が子に殺された妻のエリファイル等が、そこに刻まれてゐた。

晝すぐる頃、天使に勵まされて、嶮しき途を攀づれば、何處よりか、『心の貧しきものは、福なるかな。』の讃唱聞えて、ダンテが前額の七面の文字は、今やその一つが消えた。

第二の平は、嫉妬の罪の淨めらるゝ所、岩壁には彫刻もなく、たゞ、灰白色の岩道が、長く續いてゐる許りである。行くこと少時にして、『聖母マリア、ミカエル、ペテロ、其の他、諸々の聖者達、憐れみ給へ。』といふ祈禱の聲の幽かに聽ゆるなり、岩かげをさし覗けば、身には、粗布の衣を纏ひ、眼は俵の糸に縫はれた盲目どもが、互ひに寄り添うて祈りの語を呟いてゐた。

『この中に、以太利の人はありや。』  
と問へば、一人の女頸をあげて、

『妾は、シエナの者。名をサビアといへど、智慧はなく、自らの好運ならんよりは、他が身の上に、不幸の落ちかゝるを、何ぼう悦びやしつらむ。後年、コルレの郷に詫びて住める時、彼處に戦ありしが、身方の敗れむことを只管祈りし效あつて、敵の勝ちに乗じて、攻め寄せたりし時ほど、嬉しかりしことはなかりき。』

と語つた。

嫉妬の叫喚、恐ろしき聲を聞きながら、岩陰に添ひて、歩みゆく道のあなたに、光輝まばゆき天使が現はれて、岩の上から詩人を招いた。『慈悲あるものは、福なるかな。』の天樂に、足の軽らかに進むを覺ゆれば、時に、額の文字ひとつ消えて跡なくなつた。

第三の平は、霧立ちのぼるその中に、忿怒の罪の償はるゝ所である。ダントは、恍として夢うつゝの境に、人多く集まつてゐる堂を見た。母の慈愛に充ち

た一女、戸口に立つて、さて言ふやう、

『子よ、何とて、かくは振舞ふぞ。かなしや、父上も妾も、かくてお身を探し求むるを。』

これは、路加傳二章に見えた、聖母の姿である。

第一の幻影、消ゆるよと見れば、次には、頬に涙を流したる女現はれて、

『いかに吾が夫、パイシストラッス。お身はアゼンスの君にて在しながら、吾らが愛嬢を掻き抱く無禮者を、何故に罪し給はぬぞ。』

と罵れば、夫と呼ばれし人は、さりげなく、

『吾等を愛するものを罪するならば、吾等に、悪意を抱く輩を如何に罰すべきか。』

と答へた。

折柄、『殺せ〜。』といふ聲に驚けば、怒に燃え立つ人々が、一人の若者を押

取り圍み、石をなげつけ、打ち殺す様子。若者は、石に打たれて地上に斃れながら、斷末魔の眼に天を仰いで、己れが敵なる暴徒の爲めに、神の宥恕を訴へたのは、初殉教者ステファンである。

霧暗き中を、導師に縋りて歩めば、『神の羊よ、愍み給へ。』の歌ながく聞えた。

『師よ。あれも靈にや。』

と、ダンテの問ひに答へて、

『しかり、忿怒の縛めをゆるめん爲めなり。』

と導師が教へた。

アルプス山嶺の霧を隔て、物を見る時は、猶半透明なる土龍の眼をもつて見るが如くなれど、水蒸氣蒸しのぼれば、日光は次第に透み通る。暗き霧を出でて、明るき光を見たるダンテ、暫くして、又夢見ごとくなつた。

イチスを殺して、その父に喰べさせた咎に依つて、夢となつたフィロメエネ、

婿のタアナス王が死んだといふ虚報に會つて、怒り悲しみ、自ら縊れ死んだ女王アマタの娘ラギニアなどが現はれたが、やがて幻は消えて、『平和を求むるものは、福なるかな。』の聖詠、空にきこえ、夕となれば、導師は岩陰に座をしめて、やをら、罪業と愛とに就いて、ダンテに教へた。

第四の平は、懈怠不精進の輩が、罰せらるゝ所とて、世にありし時とは反對に、急しく駈け廻り、飛びめぐる靈の群が、數多見られた。ダンテは、幻想の中に眼を閉ぢて、思ひを夢の裡に移した。

### III

冷たき月は、日中の温みを放れ、土星遠かたの空に、寒き光を投ぐるあかつき方、ダンテの夢に、うち眩く女が現はれた。斜視の眼、扭れる足、分かれたる手、淡黄色の身體、その唇では、何ごとをか眩いてゐる。ダンテこれを見て

あれば、冷たき肌に日の光あたる如く、足も伸び、舌も弛み、失はれたる顔色、たちまち戀の艶を帯び、聲おもしろく唄ひ出した。

『妾は美しきサイレンなり。妾が妙なる聲音を聴く時は、沖ゆく舟も梶を絶え、勇ましのユリセスさへ、妾が唄に心ひかれて路を失ひぬ。妾と共に住むものは、別れし事なし。妾が慰め到り盡せばなり。』

海妖は口を開いて、迷はしの言葉を續けようとした時、ルシア天女は、天降つて、

『ゾアジル、ゾアジル、これは何者なるぞ。』

と、叱り付け、なほ誘惑者の上を睨めつくれば、妖女の衣は裂け、腹は露出して、ダンテの眼にかゝり、悪しき臭は睡りを覺ました。

『少なくとも三度は呼びぬ。起て。』

といふ導師の言語に、ダンテ立ち上り、日に背を照らされながら行く。

『悲しむものは福なるかな。』の聖詠尊くきこえて、ダンテが額の文字また一つ消え失せた。

第五の平は、貧慾の罪の償はるゝ所である。世に在る時、貧婪なりし者の靈、『吾が靈魂、塵土に染みたり。』と歎いてゐる。

その中には、アドリアナス法王も混じつてゐた。ダンテ、それを見るより、腰を屈むれば、押し止めて、

『同胞、起ちたまへ。吾れとても、君に等しく神の奴僕なるを。』

と言つた。そして、更に、

『世にある親族の者のうちにて、孫女アラジアの外は、吾が爲めに祈り呉るものもなし。』

と語り繼いだ。



猶ほ、行くこと暫くにして、貧慾の靈どもは、さまざまの故事を引ききて、或は泣き、或は語る。中にも、子を生む女のやうに泣きながら、

『聖母マリアよ。君が産室のいかに貧しき。あはれ、清廉の大官ファブリシアス、悪徳の富を、貧窮の富に更へたる人。』

と言ふ影を、なつかしみて近寄れば、靈は更に、ミラの法師ニコラスが私財をもつて、三女を汚濁の中より救ひ、正しき結婚につかした慈悲の事績を讃へた。

『吾れは、基督教國を蔽ふ悪樹の根なり。』

と、名乗るを聞けば、佛蘭西の大祖ユウゴオ・カペエであつた。

諸々の靈は、また貧慾身を滅ぼすに到つた者の事蹟を唱へた。狂暴なる慾の爲めに、欺騙者、盜賊、義兄殺しとなつたピグマリオンや、觸るゝ物黄金とならん事を願つて、遂に餓死を遂げたミダス王等が、其の題目となつた。

時に、地、大いに震ふと思へば、『榮光は神に。』の聖詠、餘韻ながく響いて來た。行手に當つて、基督出現のやうに現はれ出た一影、ダンテの生身なるを訝しみながら、問はるゝ儘に、地震の所以を説き明かす。

『吾れ、淨罪界にあること五百年、今その行果てゝ、これより、天上に昇らんとするに依つて、天地もこれが爲めに感喜し、震動せるなり。』

と、此處にある靈の修行終へて、昇天する毎に然りと語りつゝ、さて、身上を明かして曰く、

『吾は、タイタス王の御宇に生れて、シーブスを歌ひ、アシレスの事柄を歌ひし詩人スタテアスなり。百千度、わが胸の炎を燃え立たせたるは、かの雄篇エーネドにて、そは吾れに取りて母なり、吾が詩の乳母なりき。吾れ若し、詩聖ゾアジルと同じ世に生れ合ふならば、ゝに止まりて、なほ一年の苦行を重ぬるも更に否まじ。』と。

追慕つねほの情じやう、しきりなるに、『打ち明あくるな。』と、導師はダンテに目顔で知らせ  
たれど、ダンテ思はず微笑ほゑめば、スタティアス眼め早く見みて取り、

『何なにとて微笑ほゑみ給たまふや。』

と問とひかけた。今は包かむによしなく、『たゞ語りね。其の知らんとする所を、  
語りて聞きかせよ。』と言いふ導師の言葉に、初めて、それと明あかせば、スタティア  
ス驚おどくこと限りなく、喜びの餘あまりに、跪ひざまづきて、グアジルの裾すそに取り縋すがらんとす  
れば、導師は静しずかに、

『同胞はたらよ、立ち給たまへ。君も影かげ、吾われも亦また影かげなれば。』  
と言いつた。

## 二の四

その時、天使てんし現あらはれ、『義かみに渴かわくものは、福さいはななるかな。』の聖詠せいぎ空そらにきこえて、

ダンテが前額ぜんがくの文字、又もや消えた。足早あしはやき二人の靈たまに従したがつて、ダンテは猶も  
登のぼり行くほどに、道は飽食はうじきの罪償つひのはる、第六の平たひらに到いたる。

『さるにても、精勵せいれい、君のごとき智慧ちゑある方が、何とて、貧婪どんらん者の罰しやせらる  
る境には、居給たまひしぞ。』

と、導師訝あやしめば、スタティアスの靈たま、興きようがりて初めは笑わらひ、さて答こたふるや  
う、

『吾われは、貧慾びんよくのゆゑに來きたらずして、却かへつて、それとは反對うらはらなる、浪費ろうひの咎とがに  
依よつて來たれり。』

と語りつゝ、グアジルが教へに、初めて神山しんざんパルナツサスの詩泉しせんを掬おび、神  
の光明くわうみやうに眼まなこを開ひらいた詩人は、導師を賞揚しょうやうして措おかず、

『まことに、君は、其の背後うしろに燈ともを提ひげて、夜行よるく人のごときか。自ら照あら  
さざれども、後うしろより來たる者の爲めに、道を明あかにす。代あは新あらたになり、正義せいぎ

は復歸し、人間原始の時來りて、新らしき子孫、天より降るべし。」と教へ給ふ。君に依りて、我れ詩人となり、君に依りて、吾れ耶蘇信者とはなりぬ。」と悦んだ。

ダンテは、二人の詩人の背後に従つて、其の語りゆくところに耳を傾け、詩術の奥義を悟つたが、其の談話の途切れたるに心づけば、道のなかほどに果實がつくしく、匂ひ芳はしき樹が立つてゐた。樹は根に近づくに從つて、いよ／＼細く、人の攀ぢのぼるのを防ぐ爲めと見えた。傍なる岩角よりは、一筋の水流れ落ちて、飛沫は樹の葉に雨と注ぐ。詩人が、その傍に立ち寄れば、梢頭に聲ありて、

『乏しと思はるゝ糧をもて、聖母は、恥しからぬ婚禮の宴に供へたり。往時の羅馬の羅馬の女は、水をもつて足れりとし、又豆をもつて身の養ひとせしダンエルは、慧智を得たり。黄金のごとく美しかりし太古にありて、飢ゑたる舌は、櫛

の實を甘しとし、渴ける咽喉は、小川の流れをも、神の美酒と思へり。荒野に住める豫言者ヨハネは、蝗と蜂蜜とを糧としたれど、聖書に記せるがごとき偉大をなせり。』

と、節約純素の美德を讃した。

小禽を追ひて日を送る怠惰者のやうに、梢を窺ふダンテの耳に、

『神よ、吾が唇を開かせ給へ。』  
と、哀しき調べが聞え來て、黙々たる例の一例、眼は黒くして洞のごとく、顔色蒼褪め、皮膚の上より、骨を見判け得らるゝほど憔悴せし影の通るは、世にありし頃、美酒、美食に飽きたる者の、淺ましい姿と知られた。

その中より一つの影、名乗り出づるをきけば、ダンテが現世の親友、ドナテイのフォレエゼ、『吾が妻ネルラ、吾が愛せし小さき孀婦の涙によりて、吾れ、速やかにこの平らに登るを得たり。』と語り、なほ續いて、フロオレンスの女の

風俗の亂れたるを口を極めて罵つた。

さて、フォレエゼが指すを見れば、いづれも、飽食過飲の爲めに、此處へ來た靈ばかり、中に、ルツカの詩人、ブオオナジュンタの影も見えた。この人もボルゼナ湖の鰻、ゼルナシアの美酒の咎に依つて、今の憂き身とはなつた者。『戀を悟れる女君。』と、ダンテの詩の一句を誦すれば、ダンテ自ら答へて、『吾は、戀が感ぜしめたるところを描き、戀が口授するまゝを謠ふもの一人なり。』

と言ふ。

夫等の影に別れて行くと、又もや、一大樹の立てるに會ひ、近寄らんとすれば、同じく梢頭に聲ありて、

『近づかずして過ぎよ。この木は、イヴが喰ひし樹より出でたれば。』と戒めた。猶行くほどに、天使の聲して、道しるべし給ふ。曙の先驅する五

日の風、芳しきが如く、天使の翹うつ微風に、ダンテが前額の文字も消され、『饑え渴くものは、福ひなるかな。』の聖詠、たゞよひ聞えた。

スタティアスが、靈肉の干係を説くを聞いて、第七の平にのぼる。道は狭けれど、心勇み立ち、進み行けば、岩壁より噴きいづる焔は、烈々として、行手を隠した。淫亂肆欲の徒は、その火の中をぬけつ潜りつ、現世にある時、身に受けた汚穢を穢ひ淨めた。

其處にある靈達は、ダンテの身に影のあるを惜しみ、惑ふた。その中には、ダンテの詩友、ボロニヤのガイドオ、グイニッチエリイ、ブルワンスのアルノルドオ・ダニエル等がゐた。

『心の純きものは、福なるかな。』  
夕空に、聖詠の聲ひびき、歡喜の天使、炎の端に立たせ給ひて、妙なる御聲生々と、

『この中を通れ。』

とこそ磨き給ふ。ダンテ、焔の中に焼亡する人間の形體を想見して、一步も進みえぬ折から、導師傍より勵ましていふ。

『吾が子よ。まことにこれは苛責なり。されども、死するものはなし。思へ、怪獸ゲエリオンの肩に打ちのりてさへ、恙なかりしを。今は大神に近づきて、何をか疑ひ、何をか逡巡ふか。』

ダンテなほ直立して、進まねば、

『見よ、ベアトリスと汝が間には、かゝる障壁立てるを。』

と。即ち勇往邁進して、猛火の中に身を投ずれば、『來たれ。吾が父の福するもの、來れ。』と、聖詠きこえて、ダンテが前額の上のP字、あと形もなく消え失せた。

日全く暮れたれば、ダンテは、とある岩蔭に入りて、牧羊のごとく、横たは

れば、ヴァジル、スタティウスの兩詩人は、牧人のやうに傍に立つた。頭上の空を仰ぎ、星の光をのぞめば、ヤガてダンテの上を、睡りが蔽うた。かくて明け行く朝星のかけ清き牧の野に、花を摘みゆく麗しき姫の姿が、ダンテの眼に映つた。

『妾を、誰れとか問ふ人あらば、答へむ。妾はレアなり。この美しき手の、いそがはしく動きやまぬは、花束をつくらむとてなり。鏡に映して樂まんと、妾、こゝにありて自らを飾る時、妾が姉媛ラヘルは、終日鏡臺の前を離れず、妾が手もて花を飾るごとく、姉媛は、美しき眼もて見守れり。ラヘルは見るこ

とにて、妾はまた、爲すことにて足ればなり。』

夢さめて、立ち上れば、先達の詩人、早く起き出でてあり。ヴァジル即ち教へて曰く、

『業火と靈火との二つの焔を、汝は見たり。吾は、才と技とを以つて、此處

まで導きたれど、是れよりは、汝みづから行くべきなり。自らの意志のまにまに、自由に撰擇し、分別し、思慮して行くべきなり。吾を遣はしたる天上の婦人と相見るまでは。」

導師の言葉に、勇みをなし、朝露踏み分けて出で立つた。

二の五

緑色濃き天つ森かげに踏み入れれば、新らしき日の光も和らかに、地は緩やかに走り、芳香一面にうかび漂ひ、額を掠めて吹く軽い微風の外には、そよとの戦ぎもなく、その中に美し小鳥の鳴く音、葉末の揺るゝ音にまじり、かの風の神エオルスが、熱風の口をゆるめし時、キャツシの浦の松林を渡るにも似て、心地爽々しく、歩み來る行く手に、ひと筋の流れがあつた。ダンテその汀にイんで、恍惚と立つうちに、美しく氣高い女性の、たゞ一人、岸の向ふに、花ま

た花を摘み取りながら、行く姿を見て、聲を掛くれば、舞踊の場の足どりして、僅かに此方を打ち見やり、さて言ふやう、

「旅人よ。全能の神、自らの快樂の爲めに、人間を創り、この森を創りて、人間に與へ給ふ。さるを、人間自ら禁を犯して、この樂土を失ひ、嬉々なる笑聲も涙と變り、樂しき遊戯も、苦しき勞働となり果てぬ。」

と、この園の由來を述べて、

「源に清き泉あり。流れての末、二筋の川となる。一をレテと言ひて、罪業の記憶を拭ひさる忘却の水、他はユウノオと言ふ、善行の追懷を養ふ水。」

と、二川の説き明しをした。この女性の名を、マテルダといふ。「赧されしものは、幸なるかな。」と聖詠美しく、岸に沿うて、流れを遡つて行くこと、百歩のうちに、彼女はダンテの方を振り向いて、

「同胞、見給へ、聞き給へ。」

と呼ばはるので、對岸を望めば、木がくれより靈光さし出で、天樂の響、  
 囀と響き渡り、七本の黄金の木と見えたは、光輝やかなる、七基の燈臺。ま  
 た、ホザナの讃唱鳴りどよみ、花嫁の歩みよりも徐かに練り來るは、長老二十  
 四人、白衣に百合の花をかざして、千草踏み分けて行くのであつた。更に、そ  
 の後を見てあれば、星の閃き續くやうに、若葉の冠をつけた靈獸四頭、各々六  
 の翅を擴げて圍める中には、鷲首獅身の靈獸グリツフィンの頸に挽かるゝ、凱  
 旋祭の花車、車輪二つあるその片方には、紅衣、綠衣、白衣の三人の處女、舞  
 ひ躍りつゝ右の方を行けば、左の側には、紫の衣著たる處女四人、中の一人は、  
 その面に、三つの眼をもち、足どりをかしく附き纏つて行く。その後よりは、  
 服裝變れる二箇の老人、同じ面容して附き従ひ、更に卑しき様の老翁四人も附  
 き添へり。又その後からは、顔容伶俐なる、老翁の睡りながら附いて行く。  
 すべて、さきなる長老と等しく、身には白衣をつけて居るが、かざしの百合の

代りには、燃え立つ薔薇の紅を額にかざしてゐる。  
 七基の燈臺は、北斗七星の輝きに似て、長老の一人が、『新妻よ。吾に伴なへ、  
 レバノンより。』と、聲朗らかに唱へば、衆聲ひとつになつて、  
 『福なる哉、來たりし者。』  
 『手にみつる許りの百合をたまへ。』  
 と和す。  
 この歌の終ると共に、朝の空、東は薔薇の色艶かに、西は涼しき折しも、さ  
 し昇る朝日の面、たち罩めし霧に和らいで、立ち向ひて、眞面に見得るその如  
 く、天人の手より、車の内外に撒き散らさるゝ花の雲の間より、橄欖の薫床し  
 き雪白の面帕とりのけ、炎のやうなる紅衣の上に、綠色の袿を重ねた、氣高い  
 女性が現はれた。その威に打たれて、ダンテは、慈母の懷中を求むる幼兒のご  
 とく、導師ヴァジルの袖に隠れむとすれば、こは如何に、導師の婆は何處にも

見えない。花の雲の間から、天女はこの態を眺めて、

『泣きそ、勿泣きそ。よく見給へ。妾はピアトリスなるを。』  
と言つた。

ダンテは眼を伏せて、清い泉を見た。そこには、自分の陰影が映つてゐた。そして、ピアトリスの諭しに會つて、長上の前に出た童のやうに、

『君の姿を見ずなりてより、われはうつけし快樂に赴きぬ。』

と、懺悔すれば、かの天女マティルダ、傍より詩人を掴へて、

『妾を放つこと勿れ。』

と言ふ。

彼女はダンテを流れに引き入れ、椽のやうに水面を飛ぶ。

『われを清めよ。われ清くならむ。われを洗へよ。われ、雪よりも白くならむ。』といふ聖詠に連れて、清淨無垢となつたダンテが振り仰げば、ピアトリス

が慈悲の相好、とこしへに生ける光耀と現じた。

十年の憧憬、今ひと時に更へるその眺めは、何時まで見ても飽かぬやうに、

ダンテは、微妙の微笑に、身をも世をも忘れ果てた。さて、心づけば、行列ゆ

るやかに右に迂廻し初めて、滑かな車輪のゆるぎ、グリツフインの鬣ひとすぢ

をも亂されなかつた。ダンテは、マテルグとスタティウスとに導かれて、聖車

の轍のあとを踏み、丈高き林に入つて、善悪の智慧の木のもとに達した。ひと

度、人の祖アダムの手に觸れてから、萎えしぼんでゐた木も、この聖車をつな

がれて、今また、緑いろ濃き葉生ひ、薔薇よりは淡く、葦よりは濃い花の色美

しく咲きいでた。

ピアトリスは、七人の處女と共に、大木の陰に座をしめた。天樂の妙、こゝ

に極まり、ダンテは、恍惚として、地上樂園の悦樂に酔ひ惚けた時しも、忽ち

天上から一羽の荒鷺が舞ひ下つて、葉を破り花を散らし、聖車に掴みかゝれば、



車輪は、嵐の波に揺らるゝ船のごとく、右に左に傾いた。野狐はこれを見て、逸早くも、車に登れば、また車の下からは、恐ろしい蛟龍が現はれて、床を持ち去らうとした。また車の中に現はれた巨人、一妖女を抱いて、互ひに戯れてゐたが、巨人は妖女を鞭打つて、森の外へ引いて行つた。

『神よ。異邦人は来りぬ。』と、天女の調悲しきに、ピアトリスの相好も曇りかけたが、やがて炎のやうに輝きいでて、

『汝等、われを見じ。また暫くして、われを見るべし。』

と、ダンテを魔いて、以太利統一、政教一致を遂げしむる、王者の出現を豫言して、レテの水上に歩みを運んだ。

『かしこに、エウノオの流るゝを。いざ、導きて、半ば委えたる徳を回さしめ給へ。』

と、ピアトリスの一言に、マテルダは、詩人ダンテの手を取りて、スクテイ

ウスをも招ぎながら、流れに降り立つた。先に、レテの水を潜いで、清淨の身となつたダンテは、エウノオの流れに浴みて、若葉新らたなる若木のごとく、しかく純くして、上に向ふものは、今や、星の方にまでも、昇り得る身とはなつた。

天堂界

三の一

頃は春、時は眞晝、ダンテ淨罪界を離れて、天國に入らんとすれば、心に先ずおこる疑團を、導女ピアトリスに説き明かされて、第一月光天に昇つた。こ  
こは、誓ひを破り、戒めに背いたものの居るところ。磨かれたる玻璃の面か、  
或は底深くはない靜流止水にうつらふ面影の、ましろき額よりましろき眞珠を  
見分くるよりも速かならず、影うすくと現はれ出で、何事をか言はむとす  
る面持。その中の一人は、童尼ピカルダと言つて、サンタ・クララの寺院に終身  
不犯の誓ひを掛けて籠つてゐたのが、親族の爲めに拉れ出されて、フロオレン  
スの顯神の妻となつた女である。『なほ高きに昇らむと思ひ給はずや。』と、ダン  
テ試みに問ひかくなれば、彼女、答へていはく、

『何事も、神の御意のまに、それより以上を望むは曲事なり。御意こそ  
われ、静寧なるものを。』  
ダンテこの言葉を聽いて、私かに思ふやう、諸々の天界、自ら區別あり。諸  
々の靈、その依つて來たれるところの星に依つて、各の運命を荷ふものか。又、  
他より迫られて、誓ひを破つた尼僧は、何故咎めを受けるものか。ピアトリ  
ス初めの星の説は、たゞ諸々の天に顯現するのみにて、諸々の靈もとより位あ  
り、星に依りて宿命の定まれるは、神の御力を言ふものならば、プラトオが説  
も宜しけれど、この神力を謬まりて、火星、木星とあらぬ神となし、偶像を信  
ずるは、はなはだしき迷ひなりと解く。又一且誓ひを掛けた者が、いかに逼迫  
されたりとて、これに従ふは薄志の罪免かれがたと説き明す。導女は又、人  
間特有の自由意志に就いてもものがたつた。  
弓弦の未だ鳴りやまぬ先に的中せる箭のやうに、二人は早くも第二水星天に

昇つた。導女が笑み耀やかしく、大空も照り映えて、水星の光輝、いよ／＼  
えわたる折ふし、水きよき池の面に、落ちたるものを餌かと思ひ、魚類の寄り  
來ることく、光明一千、彼等の周圍に集り來つた。

この水星天にあるものは、人類又は祖國の爲めに、一大業を成し遂げたれど  
も、私の聞こえ、願望に心を傾けた君主英傑達で、中なる一影はジャニステイ  
アン皇帝であつた。自らダンテを呼びかけて、その帝國論を述べ終れば、  
『讀むべきかな、天上の聖火に光を下すサバオスの神。』と、凱歌ほがらかに、  
諸々の靈と共に消え失せた。

ピアトリス又微笑かゞやかに、贖罪の意を解いて、ダンテの疑問を拂ふ。そ  
の大意に曰く、

『遠つ祖アダム罪を犯してより、墮落に墮落を重ねしこと限りなし。主あら  
はれ給ひ、十字架に上りて、汚れし身體は罰せられたれど、不死の靈性はこよ

なき非禮を受けつ。猶太人は喜びたれど、大地悲しみの爲めに震動しぬ。神は  
何とて斯かる贖罪の方法に出でさせ給ひしや。卿等恐らくは疑はむ。これを説  
く者は、愛を解する者ならざる可からず。』

と、贖罪によつて、不死を得る意を審に明した。

第三金星天にのぼれば、光の中に聲あつて、もとの匈牙利王、カロ・マアテル  
名乗りいでて言ふやう。父たるネエプルス王シャルル二世のごとき良き父より、  
今の王ロバアトのごとき弟は生れけむと、ダンテが、良き兩親より悪しき子孫  
の生るゝ事に就きて抱ける疑ひを解く。

『人各々天稟の資質あり、遺傳に依るにしもあらず。自ら身を誤まつる者は、  
天稟の資質を知らざるなり。』

次なるは、暴君エツエリノが妹、クニツア・ダ・ロマノとて、國色の名かく  
れなく、人の妻となる事三度、かのダンテが友垣、詩人ソルデルロとも睦び合

うた美姫の靈が耀きいでた。

マルセイユの僧侶フォルコ、傍にありて、壯かりし時の風流を語りて後、天に悔恨なく、只、登天の徳として、罪の記憶せらるゝ事あるを述べ、エリコの娼婦ラハブを教ふ。これはこれ、ヨシニアの手引きしたる廉にて、救世主が地獄巡りの時、先づ一番に救はれて、今この天に在る靈なのである。

第四日光天に到れば、高僧知識二十四人、二つの光輪となつて現はれいでた。ドミニック派の長老、トオマス・アクイナス、同列の高僧達を名指したる後、熱情セラフ天人のごとき、聖フランシス上人を讃ふれば、フランシス派の長老ボナエンツウラ、正智ケラブ天人にも似たる聖ドミニクス上人の徳を讃ず。二つの光輪、うち重なつて、一層の榮光を放つた。

長老アクイナスの列に、イスラエルのソロモン王がゐた。長老は、この人を智慧第一と稱した。ダンテこれを疑へば、長老即ち答へて、

『ソロモンは王なれば、その求めつる智は王者の智、天文、論理者の智にはあらず、往古より王位に登りし者は澤にあれど、明主の少なかりしを思ひて見よ』と。

すなはち、第四日光天をぬけいで、第五火星天に到る。

静かなる夕空を迂る星のごとく、一靈ダンテを目懸けて飛び來るは、これぞ、詩人が曾祖父の父親、初めてアリギエリを名乗れるといふカツチャガイダ、かのエエネアスが極樂の野で、父親アンキセスに迎へられた時のやうに、詩人はこの靈に迎へられた。彼、フロオレンスの古俗を慕ひ、簡素質朴の美風を賞して、今の惡習を嘆いた。コンラッド帝に従つて、騎士の列に加はり、聖なる軍に殞れたれば、今この所に登つてゐるのである。彼れは又ダンテが後年の落魄を豫言した。

第六木星天に登れば、正義の爲めに救はれたる明君賢主の靈飛びめぐり、砂

に群る、百千鳥の跡の、『地を治むる者よ、正義を愛せ。』と讀まれた。  
第七土星天は、靜肅として、導女ビアトリスまた微笑まず、天つ長梯をめぐ  
る靈光かぎりなき中より、自ら罪人と名乗りて、フオンテ・アエルラナの精舎、  
聖クロオチエありて、行ひすませし高僧ピエトロ・ダアミノ、及びカシノの山  
のアポロ神、廟を壊ち、蘭若を建てし聖ベネデイクトあらはれて、教界の腐敗  
を歎く。

III

第八恒星天は、詩人が宿命を司るところ、詩篇成就の心願を凝らして訴り  
し後、過ぎ來し七つの天を顧み、下界を望む折から、導女の指す方を見れば、  
基督凱旋の大軍、満月の靜けき夜空に衆星の光を消して、嫦娥の笑めるがごと  
く、百千の燈光にまさる光の源泉、大日輪が現はれた。ダンテは眩き、心も喪

する許り、導女に勵まされて、少し退き給ひし基督を仰ぎ奉れば、聖母の薔薇、  
使徒の百合、野面の花のごとく見えわたる。天使ガブリエル舞ひ降り、聖母に  
冠を着せまゐらすれば、早く第九原動天にかくれて、諸々の聖靈、乳房を慕  
ふ嬰孩の如く天を仰いで聖母讃頌を唱ひ初めた。  
一つの聖靈すゝみ出で、ダンテに三徳の一、信につきて問ひ試むるものは、  
彼得である。  
『聖ポオロの宣ひし如く、信は望みの實質にて、未だ見ぬものゝ論據なり、  
われこれを本體とす。』と。  
第二の靈は、雅各、同じく三徳の一なる、望みにつきて問うた。第三には約  
翰、その光星赫耀として、少時ダンテを盲にして、三徳の一なる愛について  
試問した。ダンテは、ビアトリスの炎、おのれが胸に燃えそめし次第より、や  
がて神を愛するに到つた事を述べた。

その時、『聖なる哉』の讃歌に眼ひらけ、枕上に日さして、夢より起き出でて人のごとく、見れば第四の聖霊、これは人の遠祖アダムであつた。ダンテに向つて、初め罪惡をかたり終れば、『父子御靈にみ榮えあれ』の讃歌が天をどよませた。

第九序動天は、セラフ天使の領である。

ダンテは、昇天の悦びを覺えながらも、下界を慙れむ心ひとつならず、地上純潔眞實の者は、たゞ小兒あるのみなる事、及び人間に罪あるは、まことは本有の質性にあらずして、眞の統治者なきゆゑ、人類てふ一大家族が彷徨する事を思うて、座ろに歎き悲んだ。

導女が天地創造の教を聴きて、疑ひの霽れたダンテは、第十光明天に昇つた。すなはち、爰に充ちた智慧の光、歡びに充ちた眞善の愛、すべての美にまさる悦びの天である。

十二軍の説教者ベルナルド尊者、ダンテに現はれて、『見よ、高位に昂れる彼女を』と指す方を見れば、聖母を首座として、諸聖者善男善女、居ならびて、第三列には、導女ビアトリスの姿が見えた。兩親の信仰に依つて救はれた小兒の群も其處にゐた。ベルナルドは聖母を禮拜して讃頌を唱へた。その詞、

『おゝ、母なる處女、その子の女、何よりも賤かりしが、又何よりも尊きものよ。永劫の企ての搖がぬ目標、君ありて人の子を高貴ならしむ。凡ての創り主なる主も、亦君の創造物となることを避け給はざりき。君が胎内に燃ゆる愛はその光熱、永劫の平和の中に花を咲かせぬ。此處、吾々に取りて、君は愛惠の晝の炬火、死ぬべき者の地上にありては、君は希望の活ける泉なり。大いなるかな、徳なるかな、恩寵をいふ者は、君のみ前にいでぬ前より、願は翹なきによく天駭けらむ。ひとり、願へる者を救ふに止まらず、願ひに先んずる事多し。慈悲も情も恩寵も、凡そよきといふ程のもの、君に備はらざるなし。今こ

の人は底つ國より、靈ども數多見うる此處まで詣うて來たり。彼、眼もて最上の救濟の高みを見む事を、大御力に縋りて願ひまつる。われ自らの爲めに願ひしよりは、茲に一切の祈りを盡くして、彼の爲めに足らざること勿れと告る。人間の迷霧を拂ひけり、最上の悦樂を示させ給へ。天つ后よ、思ふところ、すべてさ爲し能ふ君よ、かゝる幻夢を目のあたり見し後にても、彼れが性情を保留し給へ。君が御力をもつて、人間の惑亂を鎮め給へ。ピアトリスならびに諸聖諸靈、吾にならびて合掌祈念するを見そなはせや。」

宇宙の本態、萬有相關の理、始めて悟りえて、三位一體の榮光をおろがみまつる時しも、神人融合の理に通じがたく、暫く逡巡ふ時、一閃の間に悟入して、こゝに幻影は消え去つた。今や、詩人が願望と意志とは、ひとしく巡る車の兩輪のごとく、聖き愛に牽かれては、太陽や星のやうに動き轉つた。

# 神曲

終

大正三年十月十四日印  
大正三年十月十七日發行

(定價金拾錢)  
(郵税金貳錢)

著者 村上靜人

發行者 赤城正藏

東京市麹町區三番町五〇

印刷者 中田福三郎

東京市込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 秀英舎第一工場

東京市込區市谷加賀町一丁目十二番地

ア カ ギ 叢 書  
第二十七篇  
神 曲

發 兌 元  
賣 捌 所

東京市麹町區三番町五〇  
秀英舎第一工場  
電話番號二二八〇番  
振替口座東京一〇四三三

赤城正藏

全國各書林

の本日

□□□  
□□□  
□□□  
□□□

ムラクレ  
書叢ギカア

特色

□□□  
□□□  
□□□  
□□□

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを聚取し解説せり

2. 従前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを憂ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり

3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀也 錢拾金 僅に 册各▶

アカギ叢書

毎月數篇  
逐次刊行

〔定價金拾錢  
郵稅各貳錢〕

○第一編

歐洲文藝 村上靜人編

人形の家 (一名ハラ)

○第二編

哲學叢話 中島文學士編

プラグマチズム

○第三編

歐洲文藝 日野月文學士編

廢都

○第四編

社會學叢 葛西文學士譯

群衆心理 (上卷)

○第五編

歐洲文藝 原ドストイェフスキイ

痴人

○第六編

歐洲文藝 村上靜人著

キウエトと其著作

○第七編

哲學叢話 三浦文學士篇

ベルグソンの哲學



○第八編 歐洲文藝村 上 靜人譯 ▲ サロメ ▼

○第九編 哲學叢話 中島文學士編 ▲ オイケンの哲學 ▼

○第十編 博物叢話 寺尾理學士編 ▲ イダンのウ進化論 ▼

○第十一編 日本史談 龍居文學士著 ▲ 文政文化江戸の世態 ▼

○第十二編 歐洲文藝 齋藤文學士原作 ▲ 喜劇新聞記者 ▼

○第十三編 歐洲文藝 齋藤文學士編 ▲ 壺の鬼 ▼

○第十四編 歐洲文藝 村上靜人編 ▲ 復活 ▼

○第十六編 美術叢話 佐々木文學士著 ▲ 奈良の美術 ▼

○第十七編 歐洲文藝 村上靜人編 ▲ 女の一生 ▼

○第十八編 歐洲文藝 村上靜人編 ▲ モンナ、ヴァンナ ▼

○第十九編 日本史談 龍居文學士著 ▲ 日本建築史要 ▼

○第二十編 社會學叢話 葛西又次郎譯 ▲ 群衆心理 (下卷) ▼

○第二十一編 美術叢話 桑山文學士編 ▲ 支那の美術 ▼

○第二十二編 歐洲文藝 板垣文學士編 ▲ ワンダーブック ▼

○第二十三編 歐洲文藝 村上靜人編 ▲ 父 ▼

○第二十四編 歐洲文藝 村上靜人編 ▲ ハムレット ▼

○第二十五編 歐洲文藝 日野月文學士編 ▲ 全訳 ジョバンニ (上卷) ▼

○第廿六編

歐洲文藝全集

全ジヨバンニ (下卷)

○第廿七編

歐洲文藝村上静人編作

神曲

○第廿八編

日本史談龍居文學士著

鎌倉の史話

○第廿九編

歐洲文藝板垣文學士原編作

ユートデット

○第卅編

歐洲文藝ピエトロコッサー編作

皇帝ネロ

○第卅一編

禮節叢話獨逸大使館員著

歐洲禮節

○第卅二編

歐洲文藝村上静人編作

海の夫人

○第卅三編

宗教叢話東北大學講師正編師

の宗教思想

○第卅四編

地理叢話マルコポーロ原編作

東方見聞録

○第卅五編

歐洲文藝トルスストイ原著

ドストイエフスキイ論 附モウパッサン論

○第卅六編

歐洲文藝島田青峯編作

絆

○第卅八編

歐洲文藝島田青峯編作

武器と人 (チヨコレツト兵隊)

○第卅九編

歐洲文藝村上静人編作

鴨

○第四十編

歴史叢談小林愛雄著士

神話と傳説

○第四十一編

歐洲文學ズーデルマン編作

マダダ (故郷)

○第四十二編

歐洲文學ドストイエフスキイ編

虐げられし人々 (上卷)

○第四十三編

歐洲文學ツルゲニエフ原編作

初恋

○第四十四編 演藝叢談 小林 愛雄 著 西洋演劇史

○第四十五編 歐洲文藝 フロオベル 原作 小説

○第四十六編 音樂叢話 小山 文學士 著 日本淨瑠璃史

○第四十七編 歐洲文藝 モーパッサン 原作 小説

○第四十八編 歐洲文藝 ダヌンチオ 原作 小説

○第四十九編 歐洲文藝 シェンクウィッチ 原作 小説

○第五十編 歐洲文藝 ドストイェフスキイ 編 罪と罰

○第五十一編 歐洲文藝 ドオデ 編 サオ

○第五十二編 歐洲文藝 ドストイェフスキイ 原作 編 虐げられし人々 (下巻)

○第五十三編 歐洲文藝 ハウプトマン 原作 編 日の出前

○第五十四編 歐洲文藝 ホフマンスタール 原作 編 エレクタラ

○第五十五編 歐洲文藝 ゲーテ 原作 編 ヘルマントドロテア

○第五十六編 歐洲文藝 イブセン 原作 編 幽霊

○第五十七編 歐洲文藝 ゴッテ 原作 編 女優

○第五十八編 歐洲文藝 ヘツベル 原作 編 マリア、マグダレーネ

○第五十九編 歐洲文藝 ショウ 原作 編 ウォーレン夫人の職業

○第六十一編 日本史談 文學士魚澄總五郎 著 新文明の源流 (日本洋學の發達)

274  
1028

○第六十二編 美術叢話

文學士 佐々木青葉村著

▲日本の彫刻

○第六十三編 西洋史談

文學士 齋藤茂編

▲シーザー傳

○第六十四編 歐洲文藝

イェーッ原 栗原古城譯作

▲幻の海 附イェーッ詳傳

○第六十五編 歐洲文藝

ブーダーマン 山本有三編作

▲名譽

○第六十六編 社會叢話

東北大學講師 佐藤正著

▲近世社會運動

○第六十七編 國文叢話

文學士 小山龍之輔編

▲源氏物語 (上卷)

○第六十八編 歐洲文藝

トルストイ原作 板垣文學士編

▲アンナ、カレニア

○第六十九編 國文叢話

文學士 小山龍之輔編

▲源氏物語 (下卷)

● 頒布部數十萬を越へたる 赤城叢書既刊目錄 ●

終